三重県埋蔵文化財調査報告２１０

佐田遺跡発掘調査報告

－一志郡白山町佐田所在－

２０００．３

三重県埋蔵文化財センター

序

佐田遺跡は、三重県のほぼ中央の山間部に位置します一志郡白山町の北東に所在する遺跡です。今回は、道路の改良工事に伴う破壊部分の事前調査として、発掘調査を行いました。

白山町内では、ほ場整備に伴っていくつかの発掘調査が行われていますが、佐田では初めての発掘調査となります。佐田周辺は、中世「小倭郷」と呼ばれたところです。今回の調査区の西隣には、応仁の乱に際し、足利義視が立ち寄ったとされる常光寺の推定地があります。また、16世紀末には蒲生氏郷の攻撃に合い、周辺が焼失したという記録が残っています。今回の発掘調査から、文献からだけでなく、考古学的にも実証できるものと思われます。実際に多量の瓦が出土しており、当時周辺に寺院が存在したことが明らかになりました。また、建物や井戸などの跡も見つかり、生活の様子も明らかになりつつあります。

今回の発掘調査は公共事業により現状変更される部分について行われたものです。発掘調査により、歴史解明の手がかりを得ることができます。しかし貴重な文化財が消滅してしまうことは非常に残念でなりません。調査成果は記録としてしか残すことはできませんが、当地の歴史を知る手がかりとなれば幸いです。

最後に文末となりましたが、調査に当たりご協力いただいた県土整備部道路整備課、津地方県民局久居建設部、白山町教育委員会及び地元の方々には心より感謝申し上げます。

三重県埋蔵文化財センター
所　長　　大　井　與　生

例　　言

1　本書は、三重県一志郡白山町佐田字永田前、字垣外に所在する佐田（さだ）遺跡の発掘調査報告書である。

2　この発掘調査は、主要地方道亀山白山線県単道路改良事業に伴い実施したものである。

3　現地調査は平成10年度に行った。調査体制は以下の通りである。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

技師　水谷　豊　　臨時技術補助員　浜辺一機

4　当報告書の作成は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び資料普及グループが行った。遺構・遺物の写真、執筆、全体の編集は水谷が行い、浜辺がこれを補佐した。

5　調査に当たっては白山町在住の各位、白山町役場、白山町教育委員会、県土整備部道路整備課、及び県津地方県民局久居建設部から多大な協力を受けたことを明記する。

6　挿図の方位はすべて第Ⅵ系座標を基準とする座標北で示している。なお、磁針方位は西偏６°４０′である。

7　挿図と写真図版の遺構番号は実測図の番号と対応している。写真図版は特に断らない限り縮尺不同である。

8　当報告書での用語は以下の通り統一した。

わん・・・「椀」「碗」があるが「椀」を用いた。

9　当報告書での遺構は通番となっている。また、遺構の頭には、見た目の性格によって、以下の通りの略語を用いた。

ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＤ：溝　　ＳＥ：井戸　　ＳＫ：土坑　　pit.：ピット、柱穴

10　本書で報告した出土遺物や写真・図面等は、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。

11　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前言……（1）
　1　調査の契機……（1）
　2　調査の経過……（2）
　3　調査の方法……（2）
　4　文化財保護法等による諸通知について……（2）
Ⅱ　位置と環境……（3）
Ⅲ　調査の成果～層位と遺構……（8）
　1　調査区の地形……（8）
　2　Ａ地区の調査……（8）
　3　Ｂ地区の調査……（8）
Ⅳ　遺物……（15）
　1　Ａ地区出土遺物……（15）
　2　Ｂ地区出土遺物……（16）
Ⅴ　まとめ……（30）
　1　Ａ地区について……（30）
　2　Ｂ地区について……（30）
　3　出土遺物について……（30）
　4　今後の課題……（31）

挿　図　目　次

第１図　佐田遺跡周辺の遺跡 ……（2）
第２図　調査区周辺地形図 ……（5）
第３図　調査区位置図 ……（5）
第４図　Ａ地区平面図･断面図 ……（6）
第５図　Ｂ地区平面図･断面図 ……（7）
第６図　ＳＤ２平面・断面図(1) ……（8）
第７図　ＳＤ２平面・断面図(2) ……（9）
第８図　SB18・19平面・断面図……（12）
第９図　SB20・21平面・断面図……（13）
第10図　SE17 ・ SD10 平面・断面図……（14）
第11図　ＳＤ１、ＳＤ２出土遺物……（17）
第12図～16図　ＳＤ２出土遺物……（18）～（22）
第17図･18図　SE17、ＳD10 出土遺物…（23・24）
第19図　SK12 、pit.、包含層出土遺物……（25）

表　目　次

第 1 表　遺構一覧表……（9）
第2～5表　遺物観察表（1）～（4）……（26～29）

図　版　目　次

図版 1　Ａ地区全景（南から）……（32）
図版 2　Ａ地区作業風景（南から）……（32）
図版 3　ＳＤ２（北から）……（33）
図版 4　ＳＤ２、石橋（南から）……（33）
図版 5　Ｂ地区全景（南から）……（34）
図版 6　Ｂ地区全景（北から）……（34）
図版 7　SB20・21ほか（北から）……（35）
図版 8　SE17 検出状況（北から）……（35）
図版 9　SE17（北から）……（35）
図版10　SE17・SD10（東から）……（35）
図版11　b−3 、pit. 2（柱）（南から）……（35）
図版12　Ａ地区出土遺物……（36）
図版13　Ａ地区出土遺物、B地区出土遺物……（37）
図版14　Ｂ地区出土遺物、出土瓦……（38）
図版15　出土瓦……（39）

Ⅰ　前　　言

1　調査の契機

主要地方道亀山白山線は、伊賀と伊勢を結ぶ国道165号線から分岐する路線である。一志郡白山町佐田周辺では、榊原温泉などの行楽地に向かう人々が頻繁に利用し、また、近鉄榊原温泉口駅は特急も停車する駅であるため、バスや送迎の車も多く往来する路線である。しかし、その路線は狭いところが多く、交通に支障を来していた。そのため佐田地内において新たに路線が作られることとなった。

そのことを受け当埋蔵文化財センターで平成８・９年度に試掘調査を実施したところ、佐田字永田前地内と字垣外地内において瓦、土師器が出土し、今回の発掘調査となった。なお、試掘調査・発掘調査共に永田前地区を「Ａ地区」、垣外地区を「Ｂ地区」と呼称している。

2　調査の経過

ａ　調査の経過

佐田遺跡の発掘調査は７月28日から重機による表土除去を開始し、８月４日から作業員による掘削作業を開始した。

作業は、長雨のためたびたび調査が中止となったが、10月中旬にはほぼ終了し、10月18日に現地説明会を開催した。当日は前日までの台風にもかかわらず、約80名の参加者を得た。その後補足調査等を行い、11月４日に無事作業を終了することができた。最終面積は1,500㎡であった。

調査は作業員各位の努力と配慮により無事終了することができた。ここに御名前を記し、お礼申し上げたい。

石本玉男、井上博、戎屋昭、大倉三郎、大倉昇信
大倉義定、岡村一夫、北スミ子、九里邦雄、
熊見武、小林武夫、三田明、三田忠一、茂岡春美、
谷二男、長坂欣美、長坂順子、中西清、中西繁勝、
中西ミツ、羽仁正美、堀山輝志、堀山千鶴子、
村木庄一、守口茂雄、森田末男、山脇輝夫、
山本勝

ｂ　調査日誌（抄）

７月21日　久居建設部と現地協議。

７月28日　Ａ地区（永田前地区）北側から表土剥ぎ開始。谷の部分にあたり、礫層である。11時頃、大雨のため中止。

７月29～31日　Ａ地区、Ｂ地区とも表土剥ぎ完了

８月３日　道具搬入。

８月４日　作業員初日。排水溝掘削時に瓦が多量に出土。

８月７日　包含層掘削、検出を行うが、安定した面が確認できず、苦戦。

８月10日　Ａ地区水没。Ｂ地区の検出。pit.多数検出。遺物は小破片のみ。

８月11日　Ａ地区の調査。地山と思っていた岩盤層が整地の盛り土であることを確認。溝から瓦が多量に出土。

８月21日　整地層掘り下げ。溝・流路を検出する。溝からは、人頭大の礫と共に、多量の瓦片陶器片が出土。

８月24日　溝・流路の掘削。溝からは、多量の瓦と常滑産陶器甕片、流路からは遺物は少ないが、山茶椀の破片が出土する。

９月１日　溝･流路の遺構掘削。溝には、護岸用の石組、石橋などが見られる。

９月８日　Ａ地区の遺構掘削ほぼ完了。午後から写真撮影。

９月17日　Ａ地区平板測量（水谷・浜辺）。午後からＢ地区の掘削作業を開始する。

９月28日　Ｂ地区の包含層掘削、遺構検出。溝、土坑、多数のpit.を検出。

10月９日　遺構掘削。pit.に柱が残存しているものが見られる。井戸･溝には石組が見られる。

10月14日　小雨の中作業。

10月18日　台風一過の快晴の中、現地説明会開催。約80名の参加者。

10月22日　午前中清掃。午後から写真撮影。

10月26日　遺構実測開始（水谷・浜辺）。

11月２日　遺構実測。柱取り上げ。石組井戸の石を取り除き、石組内の瓦取り上げ。

11月４日　完全撤収

3　調査の方法

a 小地区の設定について

今回の調査区では、Ａ地区・Ｂ地区それぞれの調査区を４ｍ四方の升目で切ることによって小地区を設定した。北から数字、西からアルファベットを付け、升目の北西隅の交点をその地区の符号とした。なお、この小地区設定は、国土座標とは無関係である。

b　遺構図面について

Ａ地区の平面図は平板測量により1／100で、Ｂ地区の平面図は1／20で作成している。また、井戸、遺物出土状況などは、個別に1／10で実測図を作成した。

4　文化財保護法等による諸通知について

文化財保護法（以下、法）等に関わる諸通知は、以下によって行っている。

・法第57条の３第１項(文化庁長官あて)

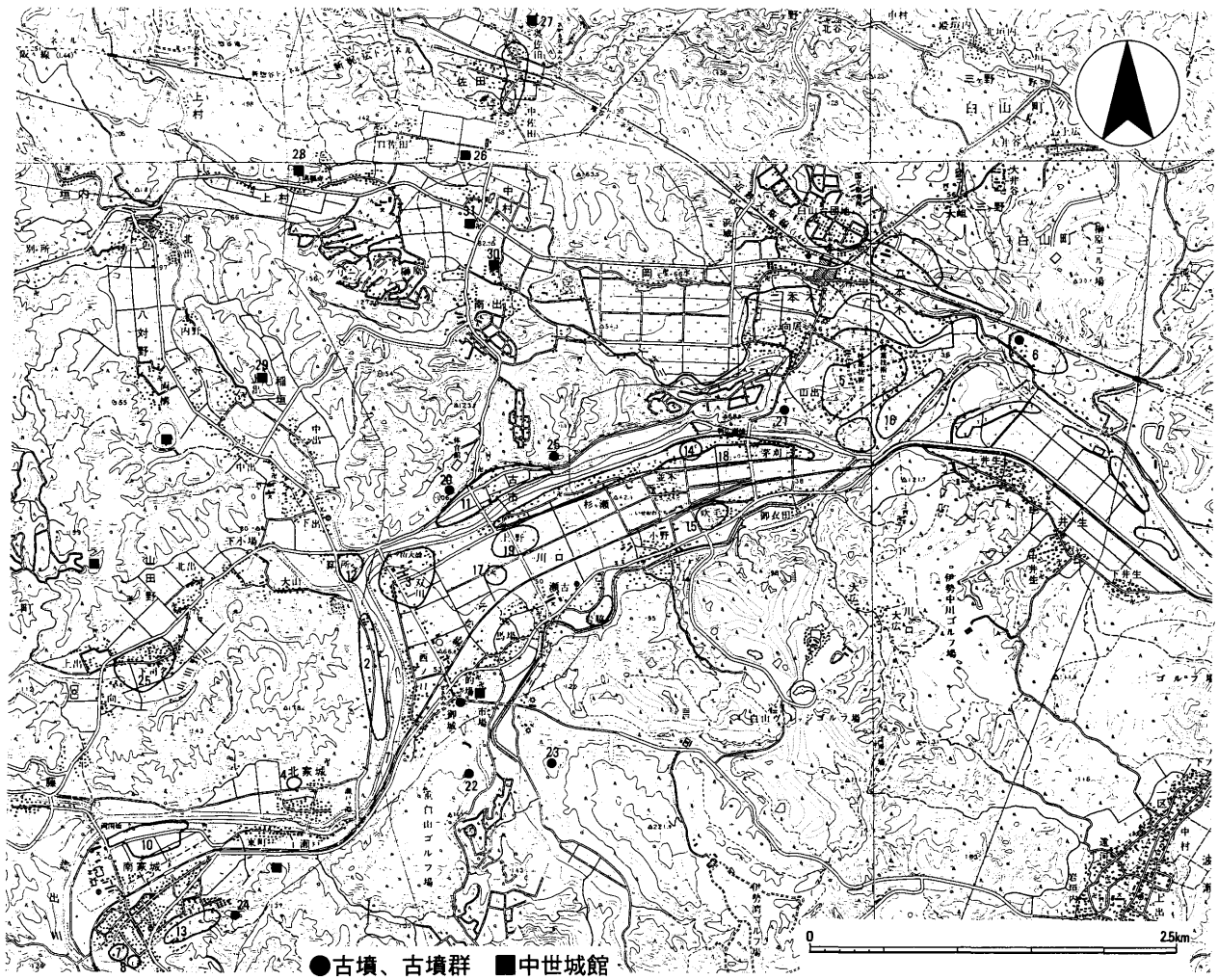
平成10年８月６日付 道整第258号

・法第98条の２第１項

平成10年８月21日付 教生第840号

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（久居警察署長あて）

平成11年２月12日教生第８－４７号



第１図　佐田遺跡周辺の遺跡（１：50,000）〔国土地理院「佐田」「津西部」「二本木」「大仰」１：25,000〕より

Ⅱ　位置と環境

白山町は、三重県のほぼ中央、一志郡西部の山間部に位置し、南は美杉村、東は一志町、北は久居市、西は布引山脈の尾根を境として青山町と大山田村に隣接している。佐田遺跡（1）は当町の北東に所在し、雲出川の支流、大村川の左岸の扇状地端部に位置する。

白山町周辺は、大和・伊賀と伊勢を結ぶ交通の要所として古くから利用されている。奈良時代には、聖武天皇が藤原広嗣の乱を避けて一時滞在した「川口頓宮」が置かれ、[1] 平城京木簡にも川口関の名が見られる。[2] また、斎王の退下の際にも滞在地となっており、古代交通路の要衝であったことが伺える。

白山町での過去に行われた発掘調査からは、縄文時代の早期から生活の痕跡が見られる。八幡遺跡（2）では、押型文土器が出土し、サヌカイト製の石鏃や破片が集中する集石群が見つかり、[3] 大角遺跡（3）でも早期終末の繊維土器片が出土している。[4] 広垣内遺跡（4）では、大鼻式以前と考えられる土器が出土している。[5] また、縄文時代以降の複合遺跡である和遅野遺跡（5）や亀ヶ広遺跡（6）では押型文土器が表面採集されており、さらに南出遺跡（7）、西出遺跡（8）においても押型文土器が散布している。中～晩期以降の縄文時代の遺跡は、高瀬B遺跡[6]（9）で土坑が12基以上検出されており、また家野遺跡[7]（10）古市遺跡[8]（11）・算所遺跡[9]（12）では土器の出土が、ミドダニ遺跡（13）、馬乗岩遺跡（14）、吹毛遺跡（15）、市河原遺跡（16）周辺には、縄文土器の散布がみられる。

弥生時代には、雲出川の段丘面に集落が営まれる。中期の竪穴住居が2棟検出された大角遺跡、中期の台付無形壺が出土した野田浦遺跡[10]（17）などの発掘調査がある。和遅野遺跡[11]では中期中葉頃の竪穴住居が見つかっている。雲出川右岸には、川口北方遺跡（18）・上野西遺跡（19）などの弥生土器の散布する遺跡もある。

古墳時代に白山地域には大規模な古墳は見られず、古市古墳（20）、岩井戸古墳群（21）、馬廻り古墳群（22）、コメンド山古墳（23）、ガガフタ古墳群（24）、高ヒ古墳群（25）、など径10m内外の小規模な円墳が1～2基単位で見られる程度である。周辺には集落としては、高瀬b遺跡で竪穴住居3棟、算所遺跡で竪穴住居・土坑が見つかっている。

奈良・平安時代には、前述の通り、畿内と伊勢とを結ぶ交通路の要衝地として機能していたと思われる。関や宮の所在地については、医王地の台地や大角が推定地となっているが、大角遺跡では関に関係のあると思われる重圏文軒丸瓦や須恵器類が採集されており、有力な推定地とされている。[12] その大角遺跡では、古代官衙や寺院跡に関連する遺構は確認されていないが、奈良時代末頃の掘建柱建物2棟、野田浦遺跡で平安時代初期の竪穴住居が検出されている。また、古市遺跡では10世紀後半の黒色土器が出土している。

中世には、白山町には「山田荘」「川口荘」「家城荘」等の荘園の名が見られる。その中で佐田周辺は、「小倭郷」に含まれていた。室町時代になると、南伊勢を領した北畠氏が美杉村多気の霧山城に居を構え、白山地域もその影響を受ける。応仁の乱の際には北畠氏を頼って足利義視が伊勢に下り、佐田常光寺を訪れた記録が残っている。[13] 文化史的には、上ノ村に1494年成願寺が築かれ、真盛上人による歓化が行われる。小倭郷内外の寺院は真盛宗に改宗するようになる。佐田にも道場として、尼寺の恵光寺が建立され、佐田における教化の中心となっている。小倭郷は地侍衆や百姓衆が重層的に一揆結合し、在地徳政が行われていた事が「成願寺文書」で見ることができ、いくつかの研究が見られる。[14] 当地に生活する人々の精神的主柱として成願寺が信仰されていたものと思われる。

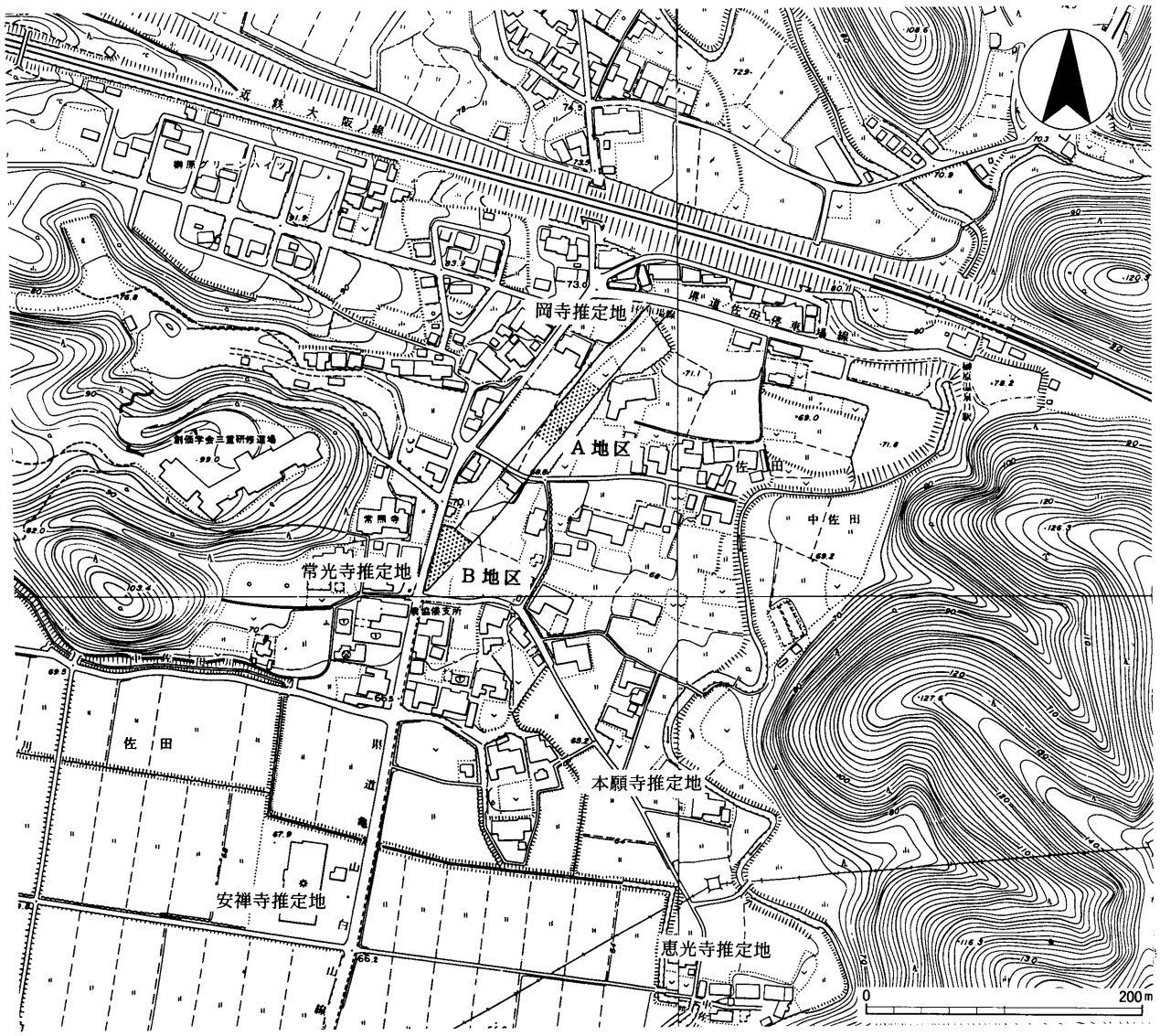
発掘調査からは、家野遺跡で14世紀～16世末の屋敷地が確認され、古市遺跡や八幡遺跡、田中名遺跡（25）等でも室町時代の遺構・遺物が確認されている。また白山町内には交通路を見下ろす丘陵地上に中世城館が築くかれており、佐田には口佐田城（26）・奥佐田城（27）、小倭内には他にも上ノ村城（28）・稲垣城（29）・南出城（30）・中ノ村

城（31）などが知られている。

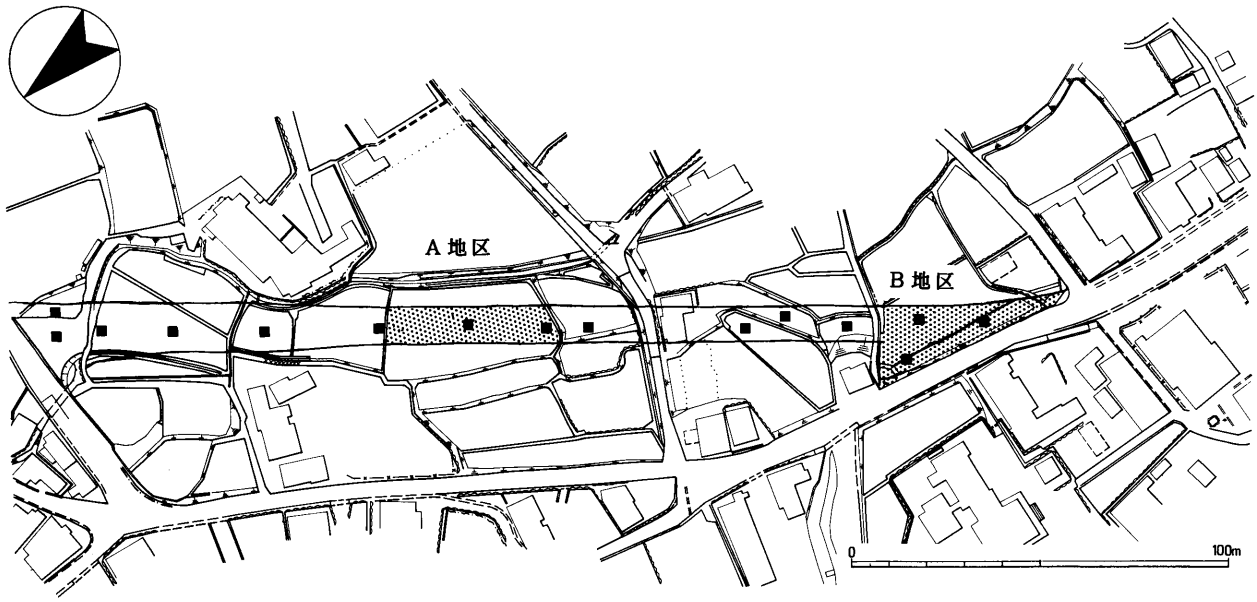
『勢州軍記』には、天正12（1583）年豊臣秀吉の命を受けた蒲生氏郷により小倭攻略が行われた記事がある。[15] これには口佐田城、奥佐田城の攻防が書かれており、佐田周辺は戦火に見回れたものと思われる。

参考文献

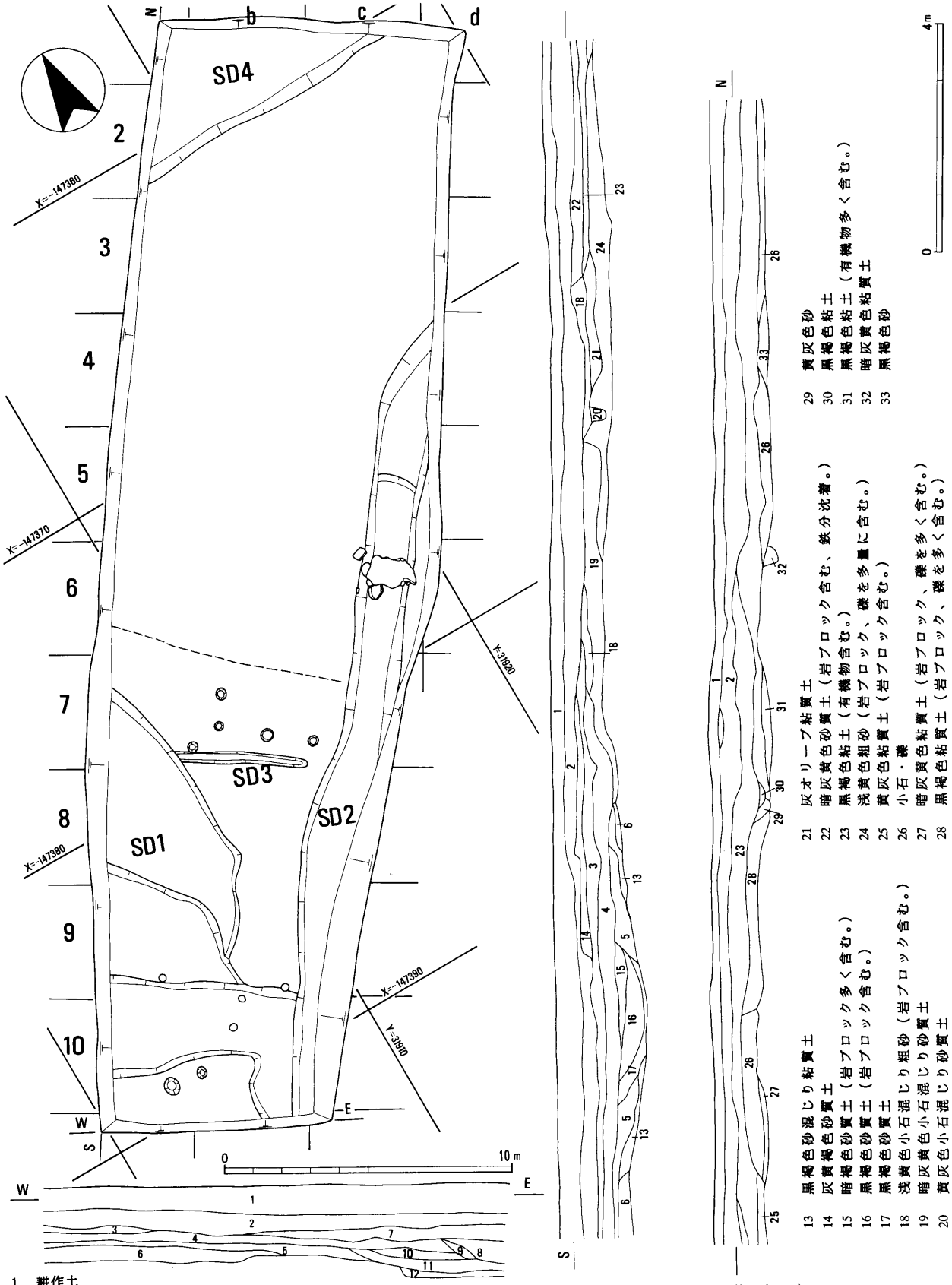
(1) 『続日本紀』巻一三「伊勢壱志郡河口頓宮 謂之関宮也」とある。
(2) 奈良国立文化財研究所『平城宮木簡一』（奈良国立文化財研究所 1969）第13次調査SK820出土。「川口関務所」とある。
(3) 吉澤良、田坂仁「Ⅷ 八幡遺跡」（『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告第1分冊』三重県教育委員会 1991）
(4) 本堂弘之『大角遺跡発掘調査報告』（白山町教育委員会 1983）
(5) 『平成3年度三重県埋蔵文化財センター年報3』（三重県埋蔵文化財センター 1992）
(6) 奥義次・田村陽一・穂積裕昌「三重県下の押型文土文土器」（『研究紀要』第2号 三重県埋蔵文化財センター 1993）
(7) 宮田勝功「家野遺跡」（『昭和63年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告第1分冊』三重県教育委員会 1989）
高森英純、服部久士「家野遺跡」（『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告第1分冊』 三重県教育委員会 1990）
(8) 増田安生・田村陽一「古市遺跡」（『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1985）
(9) 服部久士「算所遺跡」（昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ本文編』三重県教育委員会 1989）
(10) 小玉道明・下村登良夫『野田浦遺跡』（白山町教育委員会 1971）
(11) 稲生進一『和遅野遺跡発掘調査報告』（白山町教育委員会 1975）
(12) 山田猛「川口関小考」（『かにかくに』八賀晋先生の退官を記念する会 1998）
(13) 「応仁別記」（『大日本資料』第八編之一）による。
(14) 瀬田勝哉「中世末期の在地徳政」（『史学雑誌』第77編第9号 1968）、勝俣鎮夫『一揆』（岩波書店 1983）、池上裕子「村の徳政令」（『集英社版日本の歴史 戦国の群像』集英社 1992）など。
(15) 『勢州軍記』（『続群書類従』第21輯上）「小倭城攻事」による。
報告書以外の白山町の歴史については以下の文献を参考にした。
色井秀譲『白山町文化誌』 1973



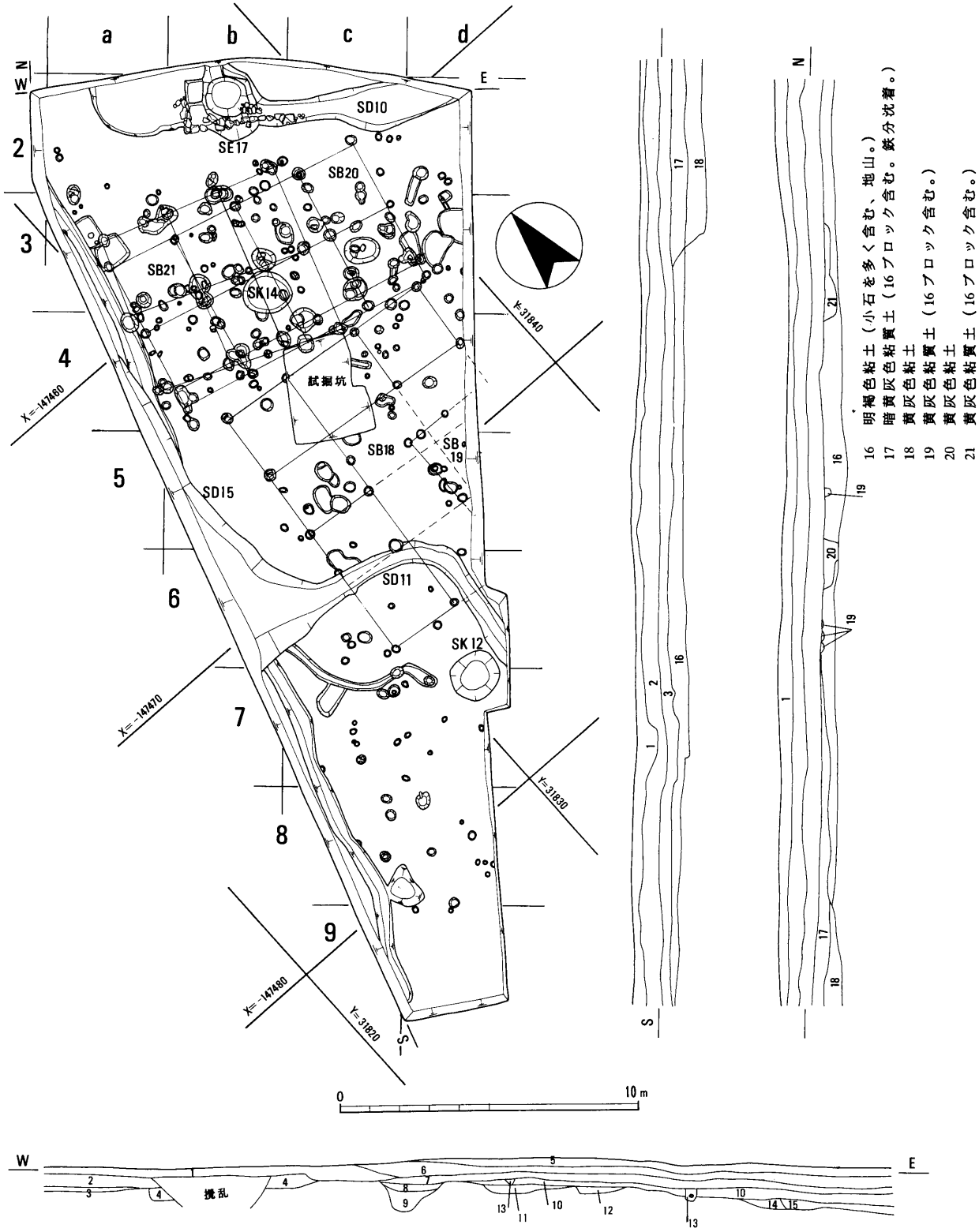
第2図　調査区周辺地形図（1：5,000）



第3図　調査区位置図（1：2,000）〔■は試掘坑〕



第4図　A地区遺構平面図（1：200）、土層断面図（1：100）〔水糸高67.6 m〕



1 耕作土
2 旧耕作土
3 黄灰色粘質土
4 黄褐色粘土（炭化物含む。）
5 客土
6 耕作土
7 灰黄褐色粘質土（炭・焼土を多く含む。）
8 黄褐色小石混じり粘質土
9 褐灰色小石混じり粘質土
10 灰黄褐色粘質土（炭化物を含む。）
11 にぶい黄褐色小石混じり粘土
12 暗黄褐色粘土
13 灰黄褐色粘質土（炭化物を含む。）
14 にぶい黄橙小石混じり砂
15 褐灰色粘土

0 4m

第5図　B地区遺構平面図（1：200）、土層断面図（1：100）〔水糸高67.8 m〕

Ⅲ　調査の成果～層位と遺構

1　調査区について

調査区は、雲出川の支流、大村川の右岸、扇状地端部に位置する。今回の調査は字永田前地区（以下「Ａ地区」と呼称)、字垣外地区（以下「Ｂ地区」と呼称)、の2箇所で行った。Ａ地区とＢ地区は約100ｍ離れており、中央に谷を挟むため、基本的な層序も異なる。そのため調査区毎に基本層序及び確認した遺構について記述することとする。

2　Ａ地区の調査

(1) 地形と基本層序

Ａ地区は、調査前の標高は約67.8ｍ、遺構検出面は約67.0ｍである。調査区の基本的な層序は、遺構・自然流路の確認できた南部では、第１層耕作土、第２層旧耕作土、第３層整地層であり、整地層の下が自然流路及び溝である。基盤層は岩盤である。第３層は、遺物が出土しておらず、時期は不明であるが、地山である岩を埋め立てて整地している。耕作を行うための埋め立てであろう。

自然流路の確認できなかった中央部以北では、第２層以下黒褐色粘質土、拳大～人頭大の石を多く含む粗粒砂、及び粘質土となる。遺物は黒褐色粘質土から古瀬戸後Ⅳ期の天目茶碗が１点出土しているが、下の層からは何も出土していない。

(2) 遺構

Ａ地区の調査で確認できた遺構は、自然の流路２条、溝１条、ピットである。

a　溝

ＳＤ２（第６，７図）　調査区の東側を南北に走る幅2.0m以上、深さ約0.8ｍの溝である。上層には人頭大の石が多く見られ、部分的に組んだ跡も見られることから、おそらく石の組まれたものが崩落したのであろう。調査区の北側にはこの溝をまたぐように扁平な石が置かれていた（図６)。石橋として使用されていた可能性が考えられる。溝の上層からは石と共に多数の瓦や陶器、土師器、青磁椀、壁土などが出土しており、寺院の廃絶後に投棄されたものと思われる。壁土には、古瀬戸陶器片が含まれており、周囲にあった建物が中世以降に建てられたことが窺える。下層には石・瓦などは見られず、若干の遺物と自然木などが見られた。元々はＳＲ１と同じく自然流路であったと思われる。上層からは15世紀中葉～後葉頃の遺物が出土しており、15世紀代に埋没したものと思われる。

b　自然流路

ＳＤ１　調査区の南西側を北西から南東にかけて走る自然流路である。遺物は、少量だが12世紀末頃の土師器皿や、13世紀前葉の山茶椀が出土しており、鎌倉時代頃の流路と考えられる。

c　柱

Ａ地区では、掘立柱建物を検出する事は出来なかったが、調査区内で３個所から柱が据えられた状態で見つかっている（第４図、○部分)。その他数個のpit.を検出しており、調査区周辺には、数棟の建物が存在していたものと思われる。柱の据えられた時期は、遺物が見つかっていないためはっきりしないものの、ＳＤ１やＳＤ２の埋没後に掘られているため、16世紀以降のものと考えられる。

3　Ｂ地区の調査

(1) 地形と基本層序

Ｂ地区は、調査前の標高は約68.2ｍ、遺構検出面は約67.6ｍである。調査区の基本層序は、第１層客土、第２・３層耕作土、第４層黄灰色粘質土で、地山は明褐灰色粘土及び岩盤である。調査区は北西に行くほど低くなっており、北西部では耕作土下に厚さ10㎝程の炭を多く含む暗褐色粘質土層が検出面を覆い、さらに北西端では炭混じり層の上に岩を埋め立てた整地層が見られる。

(2) 遺構

Ｂ地区の調査で確認できた遺構は、掘建柱建物、井戸、土坑、多数のピットである。

a　掘建柱建物

Ｂ地区からは直径約40㎝～60㎝、深さ60㎝程度の柱穴が数多く見つかり、柱が残存するものもいくつか見られる。柱穴の底には根石があるもの、岩盤

まで達するものがある。狭い調査区のため、規模等については不明な点が多い。柱穴の切り合いからは、少なくとも３回以上の建て直しがあったと思われる。多くの建物が時期を異にして存在していたと思われるが、可能性の高いものとして、４棟を図示した。

ＳＢ 18（第８図）　調査区の南部に位置する３間×４間の掘建柱建物である。ＳＤ 11 により切られているため４列目の柱穴がはっきりしないが、２間×３間の東西等の可能性も考えられる。柱穴には根石の見られるものもある。柱穴から遺物は出土しておらず、時期は不明である。

ＳＢ19（第８図）　調査区南部東寄りに位置する２間以上×２間以上の掘立柱建物である。遺物は出土しておらず、時期不明であるが、ＳＢ 18 とは時期を異なる建物である。

ＳＢ 20（第９図）　調査区北部に位置する２間×３間以上の掘立柱建物である。時期は不明であるが、ＳＢ21に先行するものと思われる。柱材が一部が残っており、根石の見られるものもある。

ＳＢ 21（第９図）　調査区北部に位置する３間×４間以上の掘立柱建物である。南の１間は庇である。16世紀末の唐津産丸皿（133）が、据えられた柱の側面に貼りついた状態で出土しており、最も新しい建物と思われる。柱が３個所に残り、根石の見られるものもある。

b　井戸

ＳＥ 17（第10図）　調査区の北側で検出した井戸である。井戸としたが、北側と西側にはそれぞれに溝が付属しており、給水と排水の役割をしていたものと思われるため、水溜的なものと考えられる。上部の掘形は撹乱のため不整形であるが、深さ 0.3 m で 1.8m の円形の堀形となる。井戸は岩盤を掘り込んで作られており、上部の岩盤に達していない部分には３段の石組が見られた。石組は溝の付属している北側と西側には見られない。底には石臼（111）が置かれ、その上に瀬戸美濃産灰釉丸皿（103）が置かれていた。16 世紀中頃以降の遺構と思われる。上層には厚く炭・焼土の堆積が見られ、蒲生氏郷の小倭攻略（1583 年）による火災の際に埋没した可能性が考えられる。

c　溝

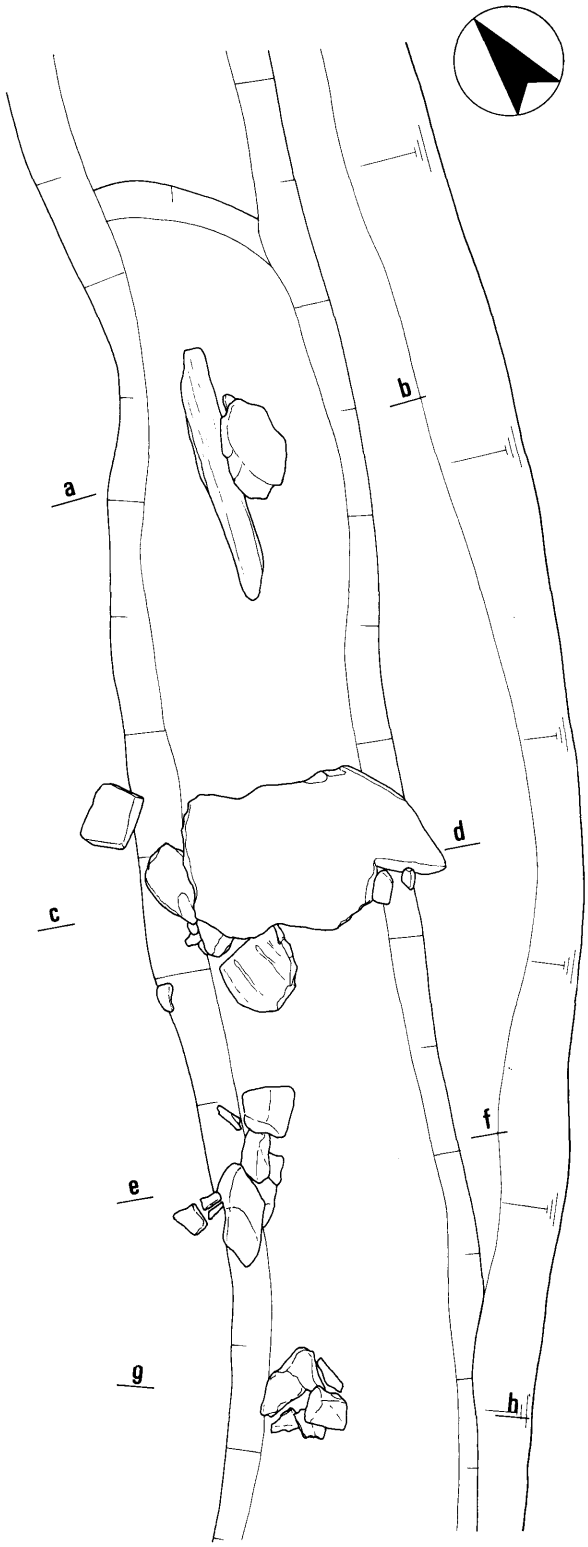
ＳＤ10（第10図）　調査区北を東西に走る幅2.0 m、深さ0.3 m の溝である。ＳＥ17と接しており、排水溝として利用されたものと思われる。ＳＥ17 と接する部分の南側に２段石組が見られる。埋土は炭・焼土を多く含んでおり、ＳＥ17 と同じく、火災により埋没したものと考えられる。

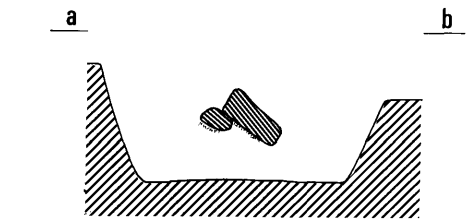
d　土坑

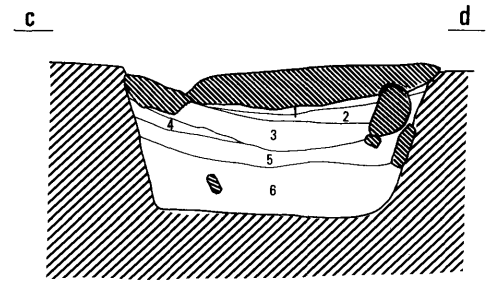
ＳＫ 12　調査区東端で検出した径 1.8m、深さ 0.2 m の遺構である。15 世紀後葉の土師器鍋が出土している。

遺構番号	性格	小地区	規模(m)	深さ(m)	形状	時期	特記事項
SD1	自然流路		不明	1.0m		鎌倉以降	
SD2	溝		幅2.0m以上	0.8m		室町	石組の可能性あり、石橋
SD3	溝	b・c－7	幅0.3m	0.2m		不明	遺物なし
SD4	自然流路	a・b－1・2	不明	0.4m		不明	遺物なし
SD10	溝	c・d－2	0.8～2.0m	0.3m		戦国～近世初頭	SE17の排水溝、一部石組2段
SD11	溝	b・c－6	幅0.6m	0.3m		不明	区画溝か
SK12	土坑	d－7	径1.8m	0.2m	円形	室町	南伊勢系鍋出土
SD13	溝	d－7	幅0.4m	0.3m		不明	SD11と同じ溝
SK14	土坑	b－3	1.6m×1.4m	0.2m	楕円形	戦国？	底部より焼け石出土
SD15	溝	a・b－6	不明	0.2m	不整形	不明	流路か、SD11につながる
SK16	土坑	c－3	1.2×0.9m	0.3m	楕円形	不明	遺物なし
SE17	井戸	b・c－2	上面不整形。上面から0.3 mで、径1.8m	1.3m	円形	戦国～近世初頭	上部3段石組。
SB18	掘立柱建物		東西3間(2.4、2.6、2.6) 南北4間(2.4×4)	約0.6m	南北棟 N5°E	不明	2間×3間の東西棟の可能性あり
SB19	掘立柱建物		東西2間以上(1.6) 南北2間以上(2.4)	0.3～0.5 m	南北棟 座標北	不明	SB18とは、時期異なる
SB20	掘立柱建物		東西3間以上(2.4、2.0×2)	0.3～0.6 m	東西棟 N20°E	不明	SB21に先行。柱残存。
SB21	掘立柱建物		東西4間以上(2.4×4、2.2)	0.3～0.6 m	東西棟 N12°E	近世初頭	南に1間の庇。柱残存。唐津焼椀出土

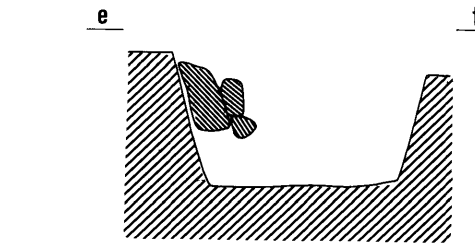
第１表　遺構一覧表

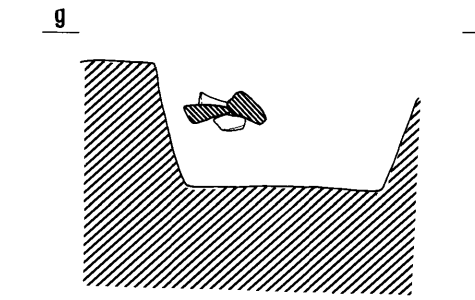




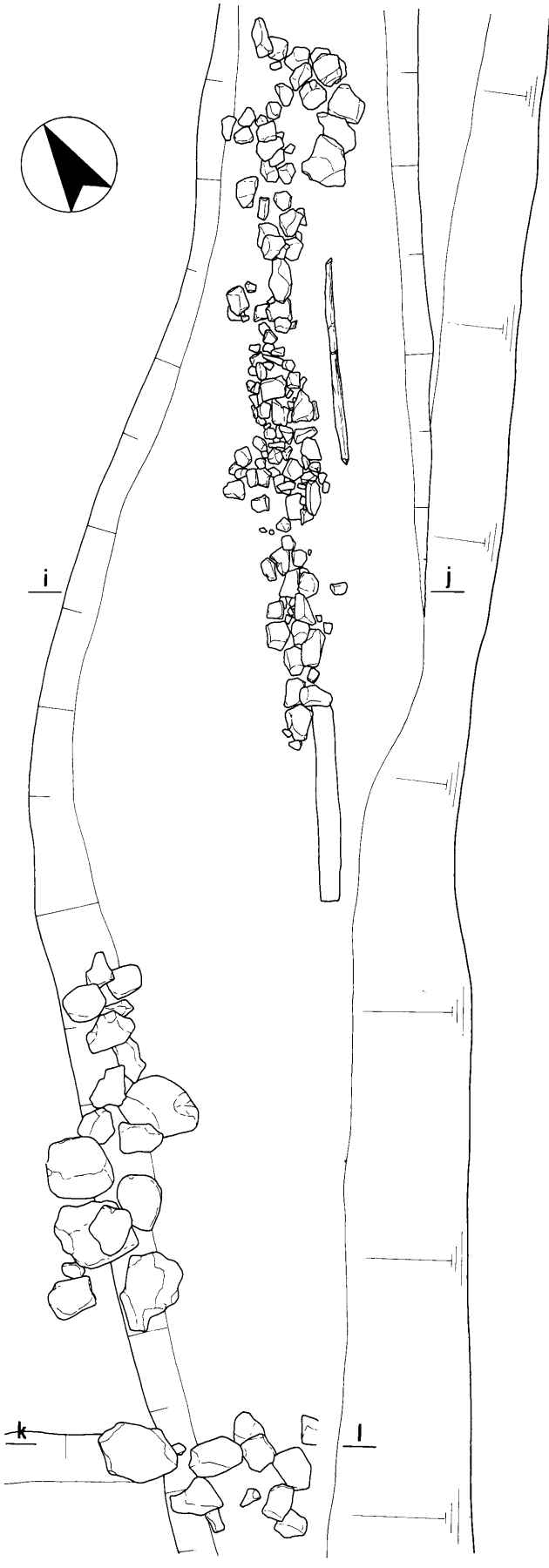


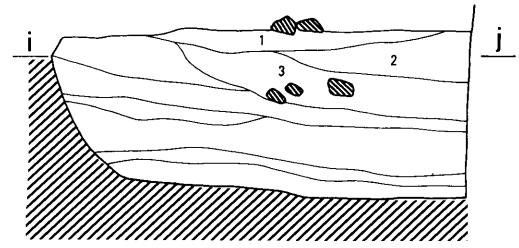
1　灰黄褐色粘土
2　黄灰色小石混じり砂
3　黄灰色砂混じり粘土
4　黄灰色砂混じり粘土（炭多量に含む。）
5　黄灰色小石多く混じる砂
6　褐灰色粗砂（岩（地山）ブロック多く含む。）



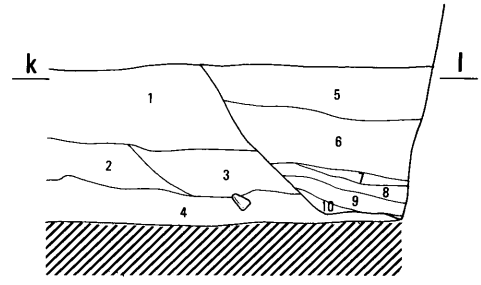


第６図　ＳＤ２平面・断面図（1）（１：40）〔水糸高67.2ｍ〕

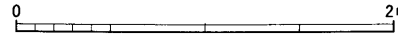




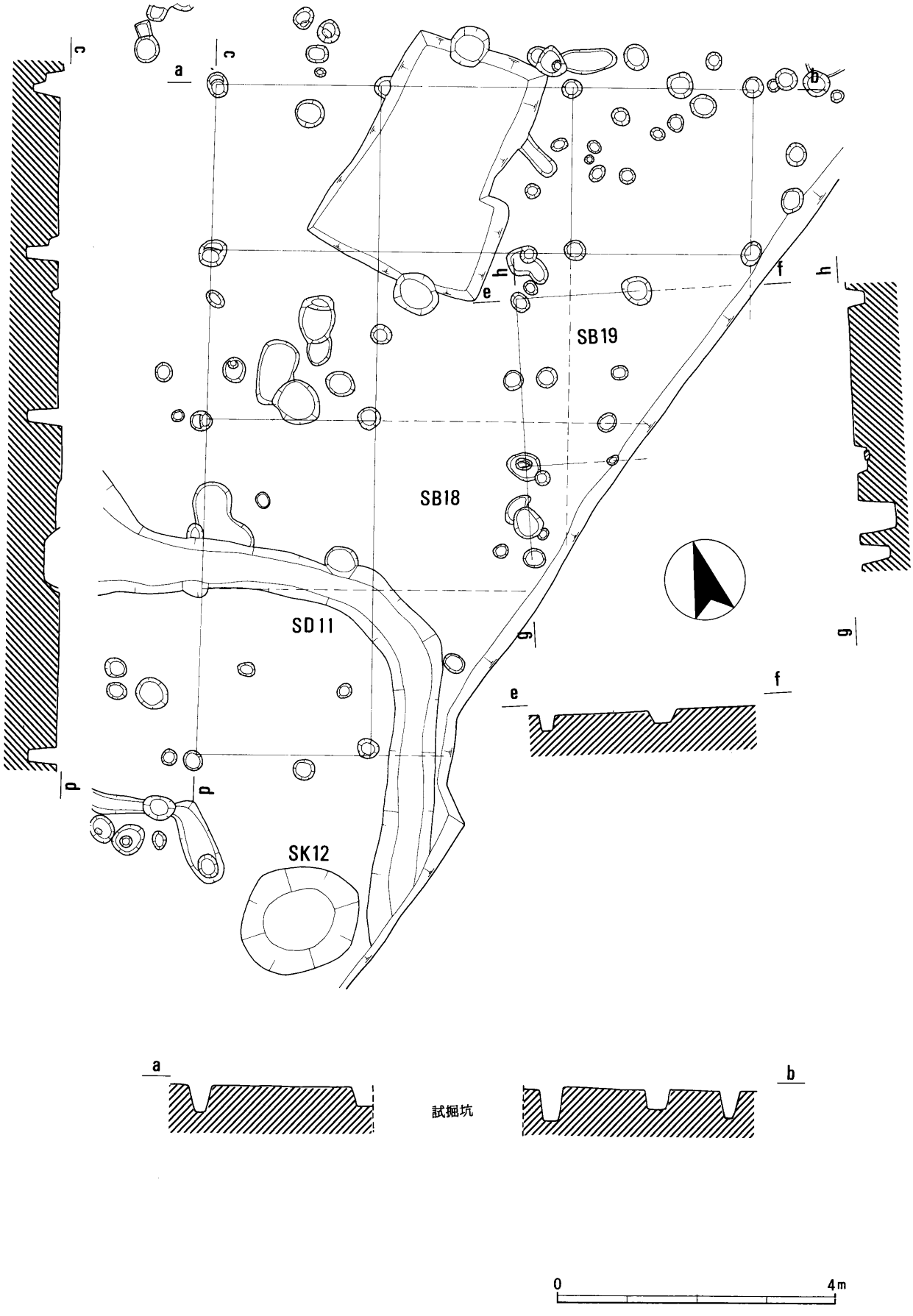
1　黄灰色粘質土（瓦・陶器・石多く含む。）
2　灰黄褐色砂質土
3　黒褐色粘質土（瓦・陶器・石多く含む。）
4　暗灰黄色砂質土（岩（地山）ブロック多く含む。）
5　暗灰黄色粘質土（岩ブロック多く含む。）
6　暗灰黄色小石混じり砂質土（木など有機物を多く含む。）
7　暗灰黄色小石混じり砂質土（木など有機物を含む。）
8　暗灰黄色砂（岩ブロックを多く含む。）
9　黄灰色砂（岩ブロック、有機物を多く含む。）



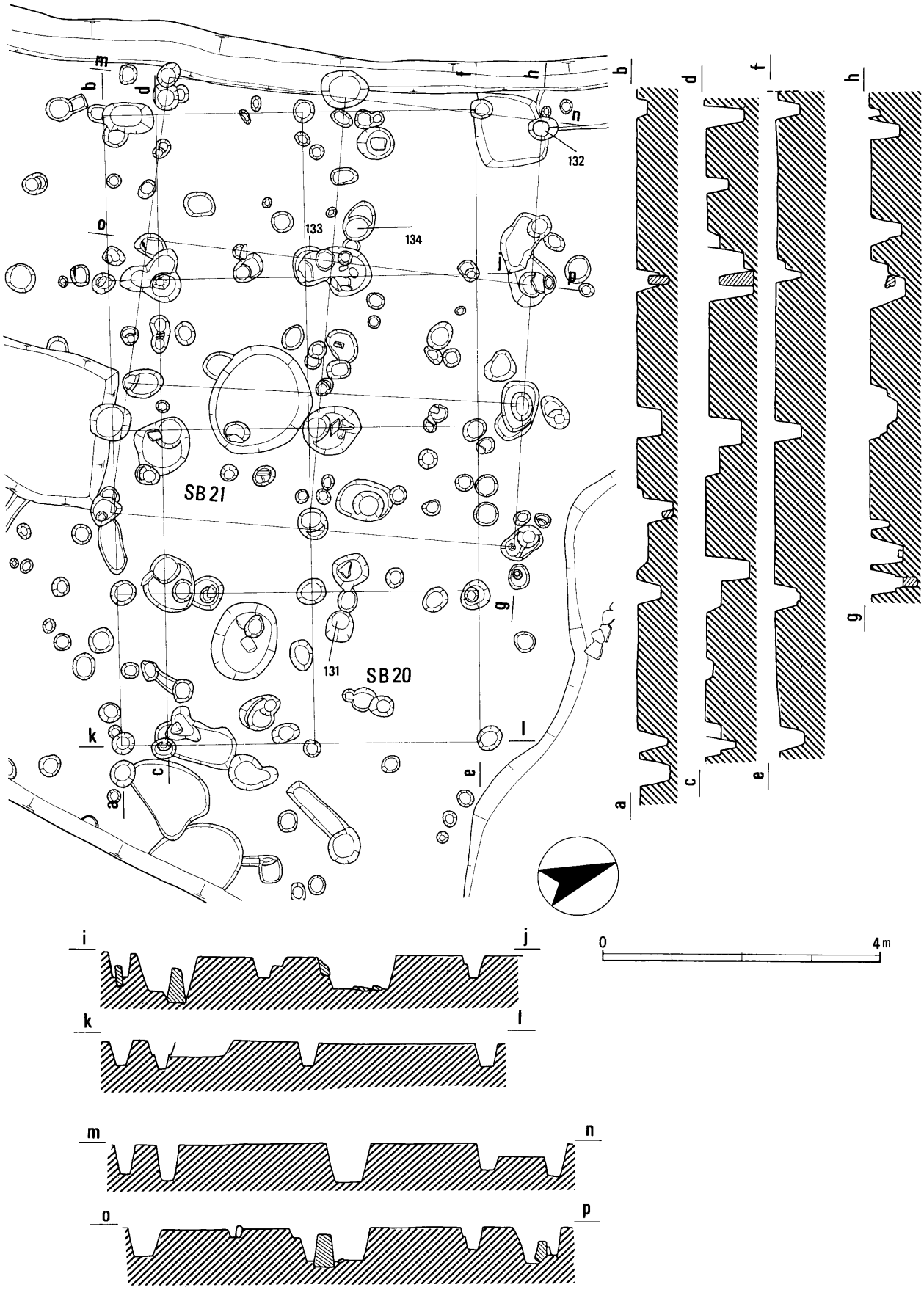
1　黄灰色粘質土（石、岩（地山）ブロック多く含む。）
2　黒褐色粘質土（岩ブロック含む。）
3　黄灰色砂混じり粘質土（岩ブロックを多量に含む。）
4　黄灰色粘質土（有機物を多く含む。）
5　黄灰色粘質土（石、岩ブロック多く含む。）
6　黒褐色粘質土（岩ブロック含む。）
7　暗黄灰色砂
8　暗黄灰色砂混じり粘質土
9　暗黄灰色砂
10　暗黄灰色砂混じり粘質土



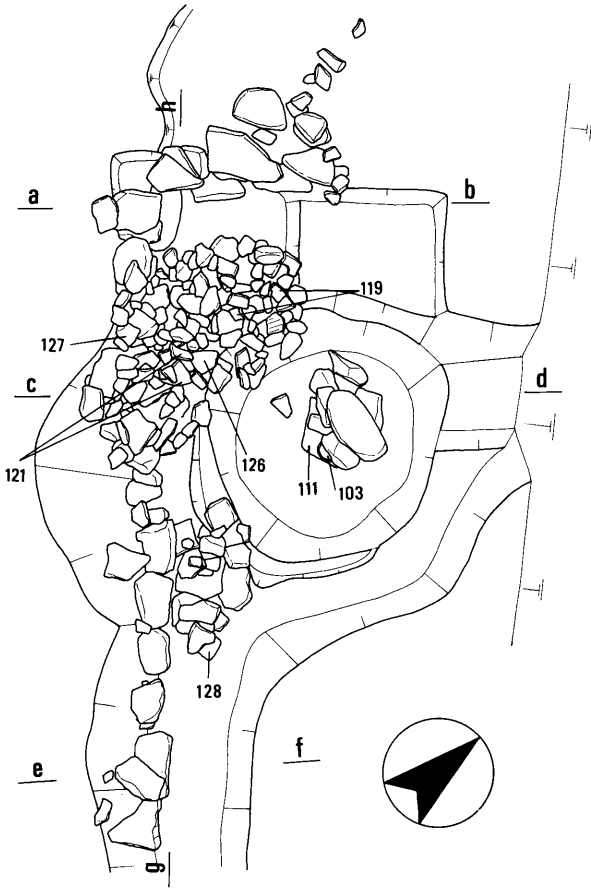
第７図　ＳＤ２平面・断面図（2）（１：40）〔水糸高67.0 m〕

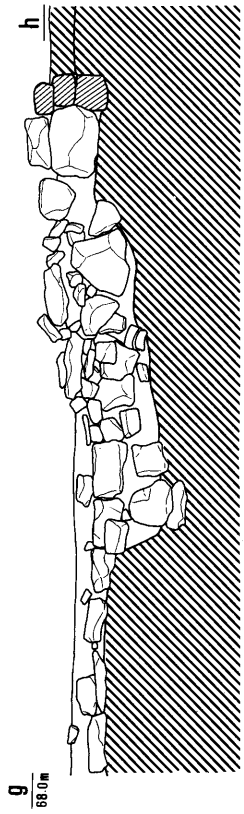


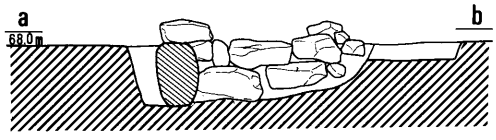
第8図　ＳＢ18・19平面・断面図（1：80）〔水糸高67.6 m〕

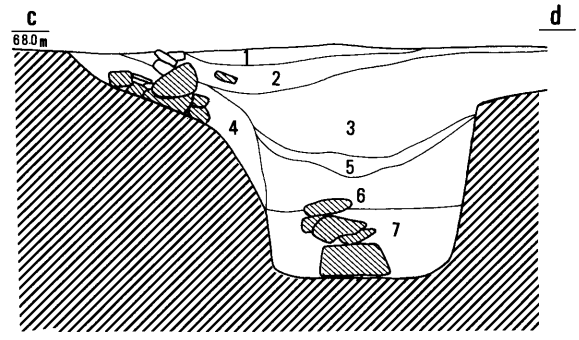


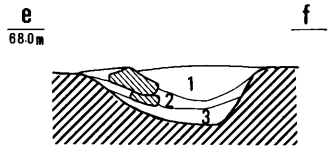
第9図　ＳＢ20・21平面・断面図（1：80）〔水糸高67.6 m〕





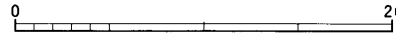






1　黄灰色粘質土
2　黄灰色粘質土（炭・焼土を多量に含む。）
3　灰黄褐色粘質土

1　黄灰色土
2　黄灰色粘質土
3　黄灰色粘質土（炭・焼土を多量に含む。）
4　灰黄色粘土（裏込め）
5　褐灰色粘質土（灰黄色粘土ブロック、礫多く含む。）
6　褐灰色粘質土
7　灰黄褐色粘土（有機物を多く含む。）



第10図　ＳＥ17・ＳＤ10平面・断面図（1：40）

Ⅳ 遺　物

1　A地区出土遺物

a　ＳＤ１出土遺物（１～９）

ＳＤ１からは、土師器皿、東海系無釉陶器椀（以下、「山茶椀」）等が出土している。１はロクロ土師器で、12世紀中頃のものである。２～５は中北勢系の土師器皿で、口縁部外面がヨコナデされており、13世紀前葉のものである。

７・８は渥美産の山茶椀で、13世紀前葉のものである。ＳＤ１からは、図示出来たもの以外に山茶椀の破片が出土しており、尾張産の山茶椀も渥美産のものと同じように出土している。

９は木製品で、中央に穿孔がある。荷札と思われる。

b　ＳＤ２出土遺物（10～70）

ＳＤ２からは、多量の石とともに、瓦、土器が多く出土している。しかし、大半は、甕体部の破片や瓦の破片であり、遺物量に比べ図示出来るものは少ない。

土師器は、皿、羽釜、鍋が見られる。

10～15は、口径7.0～8.5cmの小皿で、10～14は南伊勢系の、15は中北勢系のものである。16～18は、口径10cm前後の土師器皿で、21は口径15.5cmの、やや大型の土師器皿である。17の口縁部には油煙が付着している。19はいわゆる京都系の「へそ皿」である。20は瓦器皿で、内面には暗文が見られる。瓦器皿は１点のみしか出土していない。

羽釜（22～24）、鍋（26～31）はいずれも南伊勢系のものである。羽釜は口縁部を折り返し、端部がナデられ、面を持つものである。鍋は25～27は、伊藤編年の３段階ｂで15世紀前半のもの、28～31は４段階ｂで15世紀後葉のものである。

瓦質土器は、瓦器皿の他、火鉢・風炉類（32～38）、鍋（39）がある。火鉢・風炉類は、いずれも部分的な出土であり、全体の分かるようなものは出土していない。32は雷文、33・34は花菱文、35は菊花文が押印されている。36・37はその脚部である。

陶器皿・椀類（39～49）は、いずれも古瀬戸後期のものである。39・40の縁釉小皿は、口縁部周辺に鉄釉が塗られ、40の内面には円形の模様がある。41・42は片口の灰釉卸皿で、41の底部内外面には、重ね焼きの痕跡が残る。45・46は鉄釉天目茶碗、44・47・48は灰釉の平椀である。49は香炉になると思われる。

51～54は、青磁の椀である。52の外面には、蓮弁文が見られる。

陶器には練鉢（55～58）、甕が出土している。55・56は、灰白色を呈しており、信楽産と思われる。58は常滑産片口鉢で、内面には「＊」状のヘラ記号が見られる。いずれも内面は使用によりかなり摩耗している。

ＳＤ２からは、常滑産甕の破片が多量に出土しているが、大半が胴部の破片であり、図示できたのは7点である。61～65は口縁部の断面が「Ｎ字」をしており、14世紀代のもの、62～64は、口縁部の下端が胴部に接しており、15世紀後葉のものである。

66は茶臼である。摩滅が激しい。

67～70は、木製品である。67は曲物の底板で、側面に木釘が残っている。69は漆椀で、黒漆の地に赤漆で鳥、山が描かれている。70は木簡である。表には「蘓民将（来）」の文字が書かれ、裏は文字はあるものの判読不明である。[1]

c　ＳＤ２出土瓦（75～98）

SD2から整理箱約30箱の瓦片が出土している。破片のため、図示出来るものは少ない。

軒丸瓦（75～83）は、いずれも左巻き三巴文で、周囲を珠文で飾るものである。珠文は大小の２種類がある。75～78、81は、珠文の小さいものである。中心の残る75・76・79には、中央に鳥？の文様があり、同範と思われる。79の凹面には、指頭痕が見られる。80・82・83は珠文の大きいものである。いずれも隅瓦である。

軒平瓦（84～90）は、いずれも中央に退化した花文を飾る均等唐草文になると思われる。84～88は内･外区を区画する界線が全周するもの、89・90は界線が下には見られないものである。界線が見られるのは法隆寺の編年[2]では、室町中Ⅰ期（15世紀

前葉）までの特徴であり、89・90はⅠ期～Ⅱ期（15世紀中葉～後葉）への過渡期に当たるものと思われる。

91は鬼瓦である。ＳＤ２からはもう１点鬼瓦の破片が出土している。径約1.0cmの珠文の周りには、コンパスのようなものの痕跡が見られる。

92～96は、丸瓦である。ＳＤ２から出土している丸瓦は、破片のため、凹面の吊り紐の不明なものが多い。また、凸面には縄タタキの痕跡の残るものが多い。法隆寺の室町中Ⅱ期の丸瓦では縄タタキは完全にナデ消されていることから、15世紀前葉～中葉の瓦と思われる。94は吊り紐Ａの痕跡が見られる。96の凹面には細いタタキが見られる。

97は、平瓦である。凸面に鳥？のスタンプが３カ所見られる。類例は確認できなかった。その他の平瓦は破片であり、また二次焼成を受けているものが多い。そのため、凸面に糸切りの痕跡の見られるものは存在したが、その他の調整は不明である。

2　Ｂ地区出土遺物

ＳＥ17とＳＤ10は付属する施設であり、ともに炭・焼土層によって埋没している。16世紀中葉～末頃の遺物と考えられる。

a　ＳＥ１７出土遺物（99～111）

大窯期の陶器皿類（99～105）、白磁椀（106）、土師器鍋（107）、羽釜（108・109）、陶器擂鉢（110）、石臼（111）が出土している。

100は内面見込みに印花のある灰釉端反皿で、大窯第２段階のもの、102・103は志野皿で、大窯第４段階のものである。

106の底部外面には、重ね焼きの小石が付着している。明産か。

108は中北勢系の羽釜で、16世紀中頃のもの、109は南伊勢系のものである。

110は５本１単位の擂り目が見られる。信楽産である。

111の石臼はＳＥ17の底に置かれていたものである。底部の溝は摩耗のため不鮮明だが、８分画６溝式と思われる。

b　ＳＤ10出土遺物（112～121）

大窯期の陶器椀（112～114）、土師器鍋（115～117）、羽釜（118）、壷（119）、擂鉢（120）、練鉢（121）がある。

112・113は志野皿である。大窯第４段階のものである。114は鉄釉の小型の天目茶椀と思われる。

115・116は南伊勢系で、伊藤編年４段階ｅ型式以降のものと思われる。118は中北勢系で、ともに16世紀中頃のものである。

120は信楽産で、３本１単位の擂り目が見られる。121は比熱により表面が著しく剥離している。

c　SE17・SD10出土瓦（122～128）

122・125・128は、SE10の石組として使われたものであり、123・124・128はＳＤ10を覆っていた炭層から出土している。

122は、軒丸瓦である。123～128は丸瓦である。123は玉縁部に焼成前の釘穴が見られる。凸面には「×」のヘラ記号が見られる。126～128の凹面には、吊り紐の痕跡が見られる。126の凸面は、縄タタキの痕跡を磨き消している。

d　ＳＫ12出土遺物（129・130）

南伊勢系４段階の鍋が出土している。

e　pit.出土遺物（131～134）

131は南伊勢系の土師器皿である。口縁端部がヨコナデされており、13世紀の遺物と思われる。

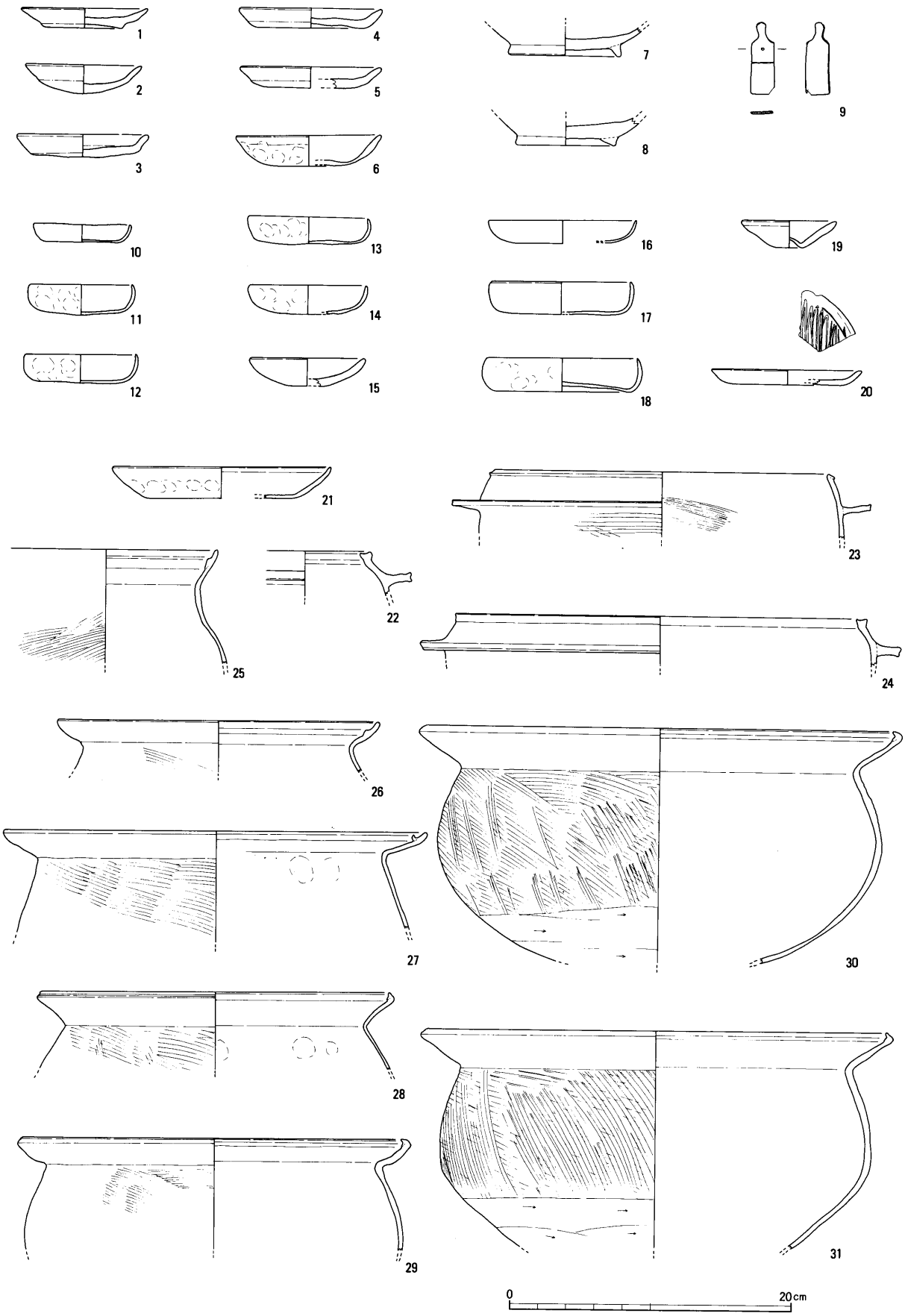
132・133は、ＳＢ21のpit.から出土している。132は大窯期の灰釉稜皿、133は唐津産の丸椀である。いずれも16世紀末のものである。

f　包含層出土遺物（135～138）

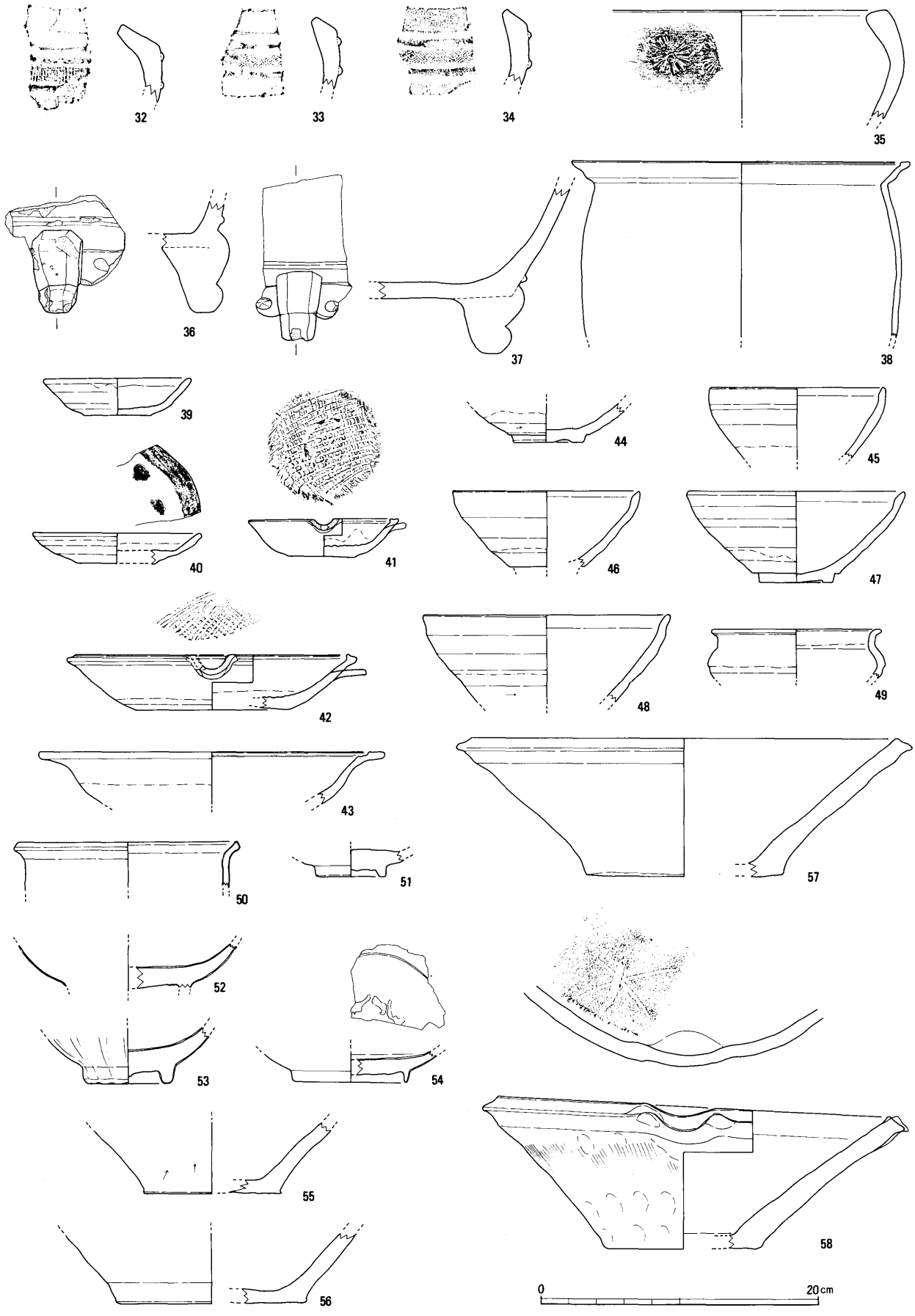
包含層から山皿（135）、ロクロ土師器（137）の12・13世紀の遺物が出土している。包含層からのわずかな出土遺物ではあるが、当地に12世紀から生活をしていた可能性がある。

註

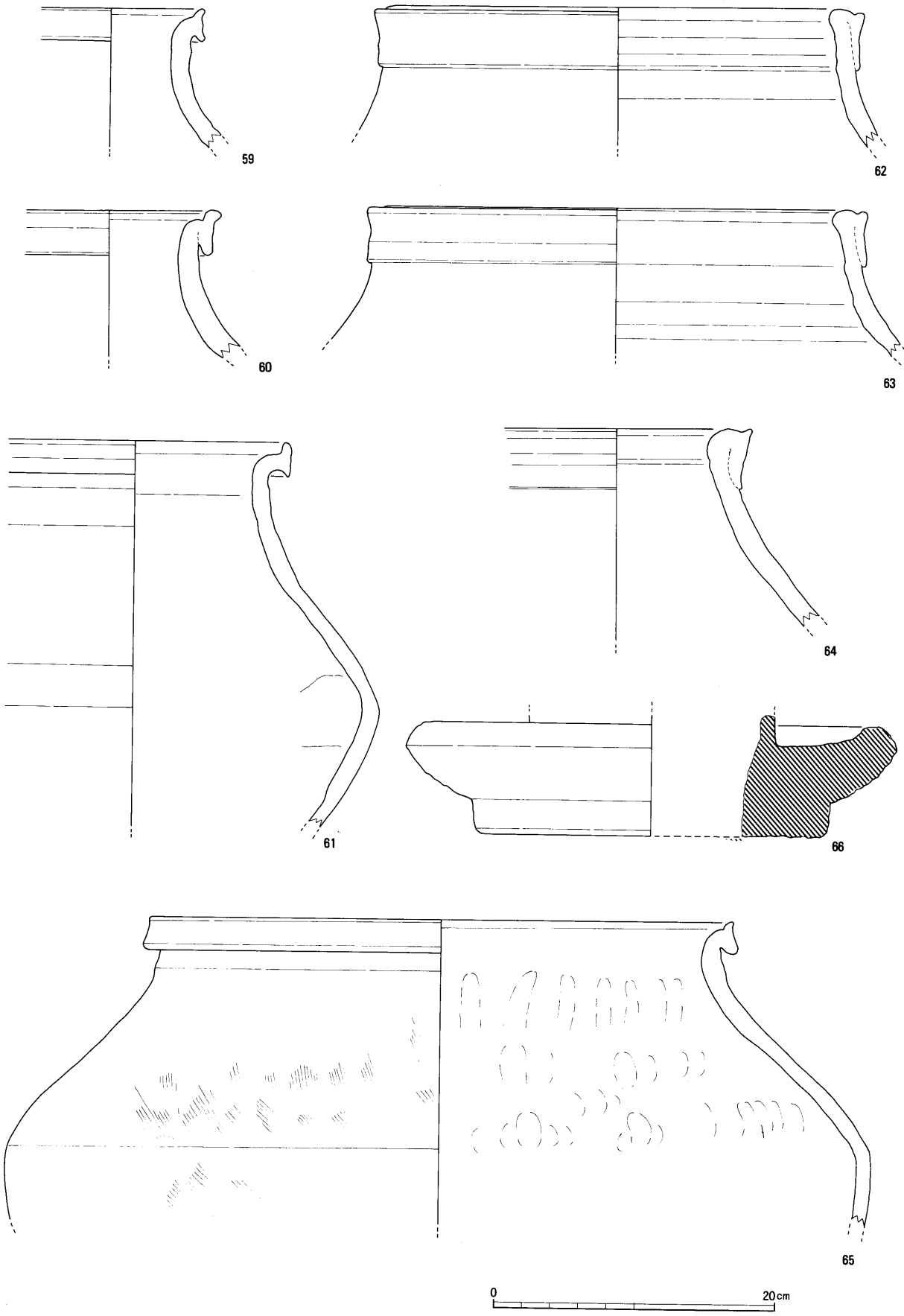
(1)　小林秀氏（県史編纂室）の御教示による。
(2)　『法隆寺の至宝』第15巻（小学館　1992）



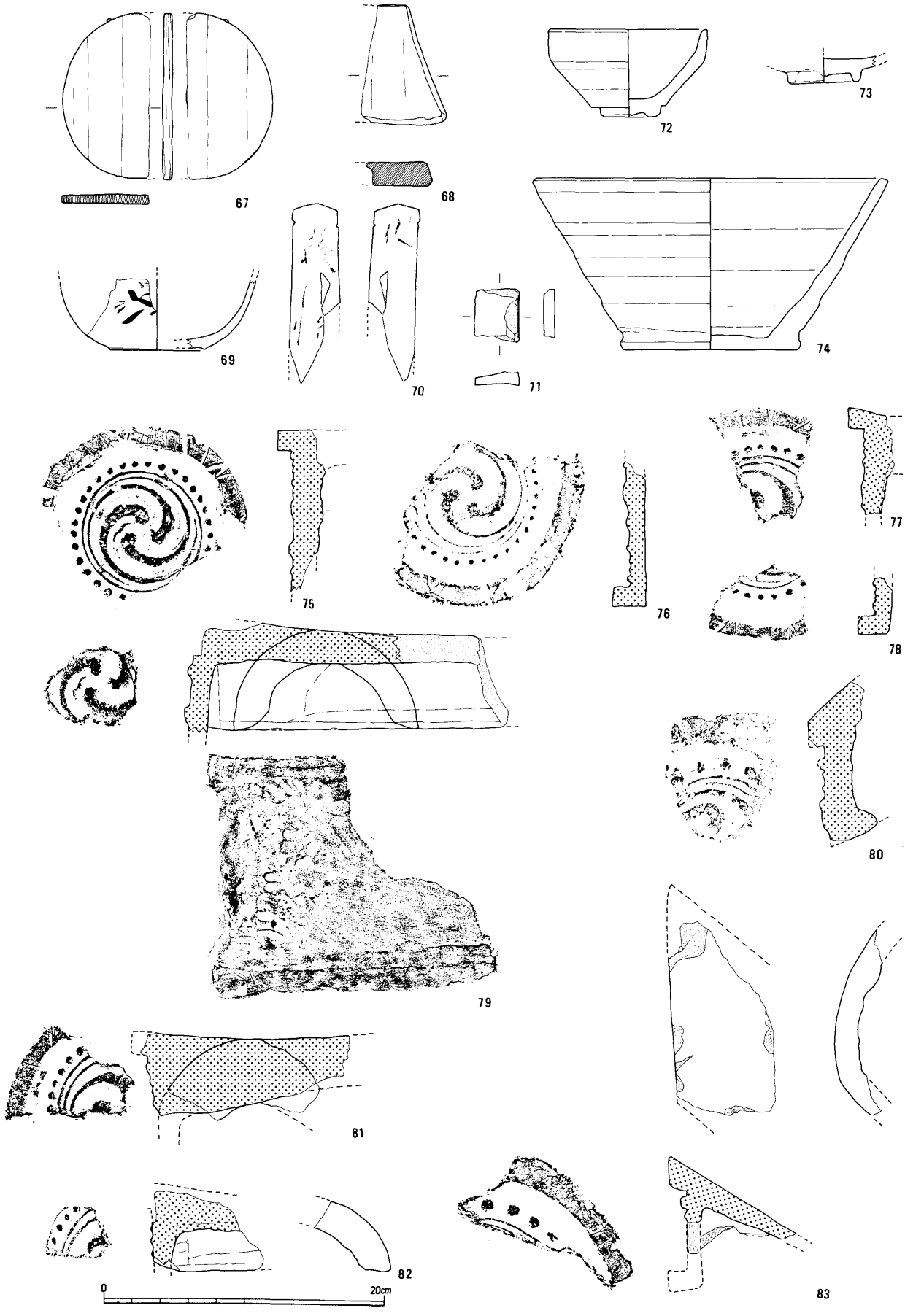
第11図　ＳＤ１・ＳＤ２出土遺物（１：４）



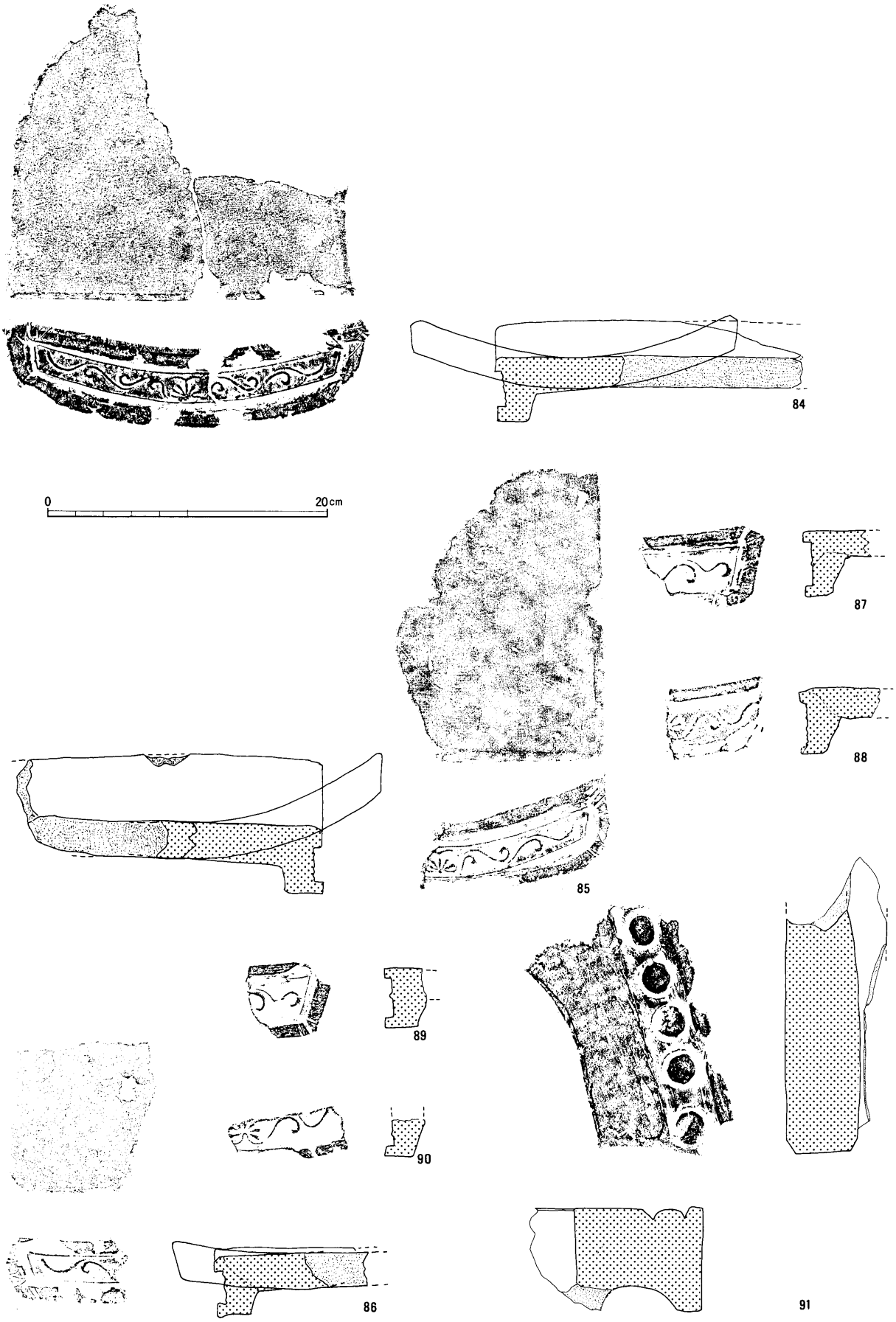
第12図　ＳＤ２出土遺物（１：４）



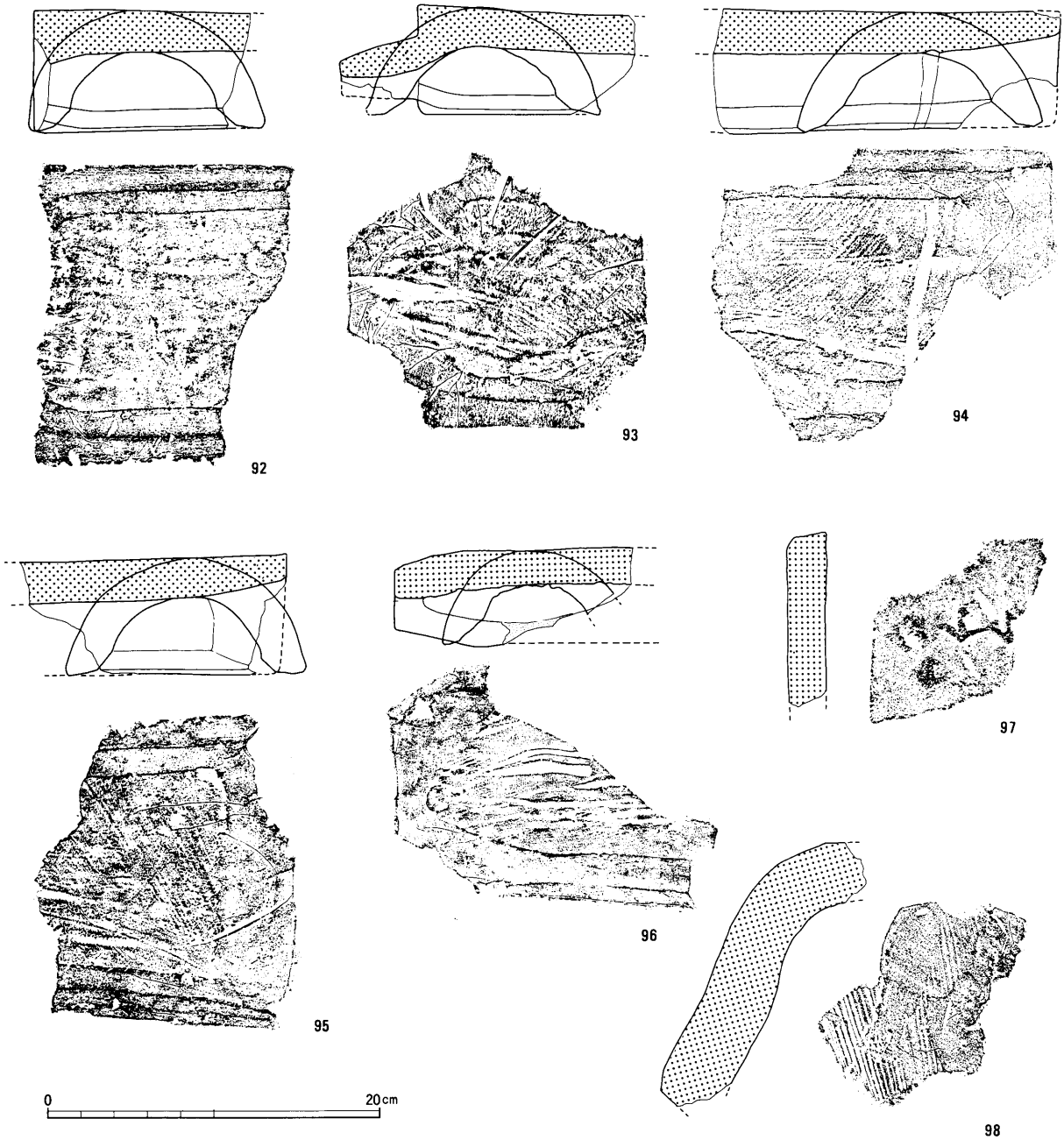
第13図　ＳＤ２出土遺物（１：４）



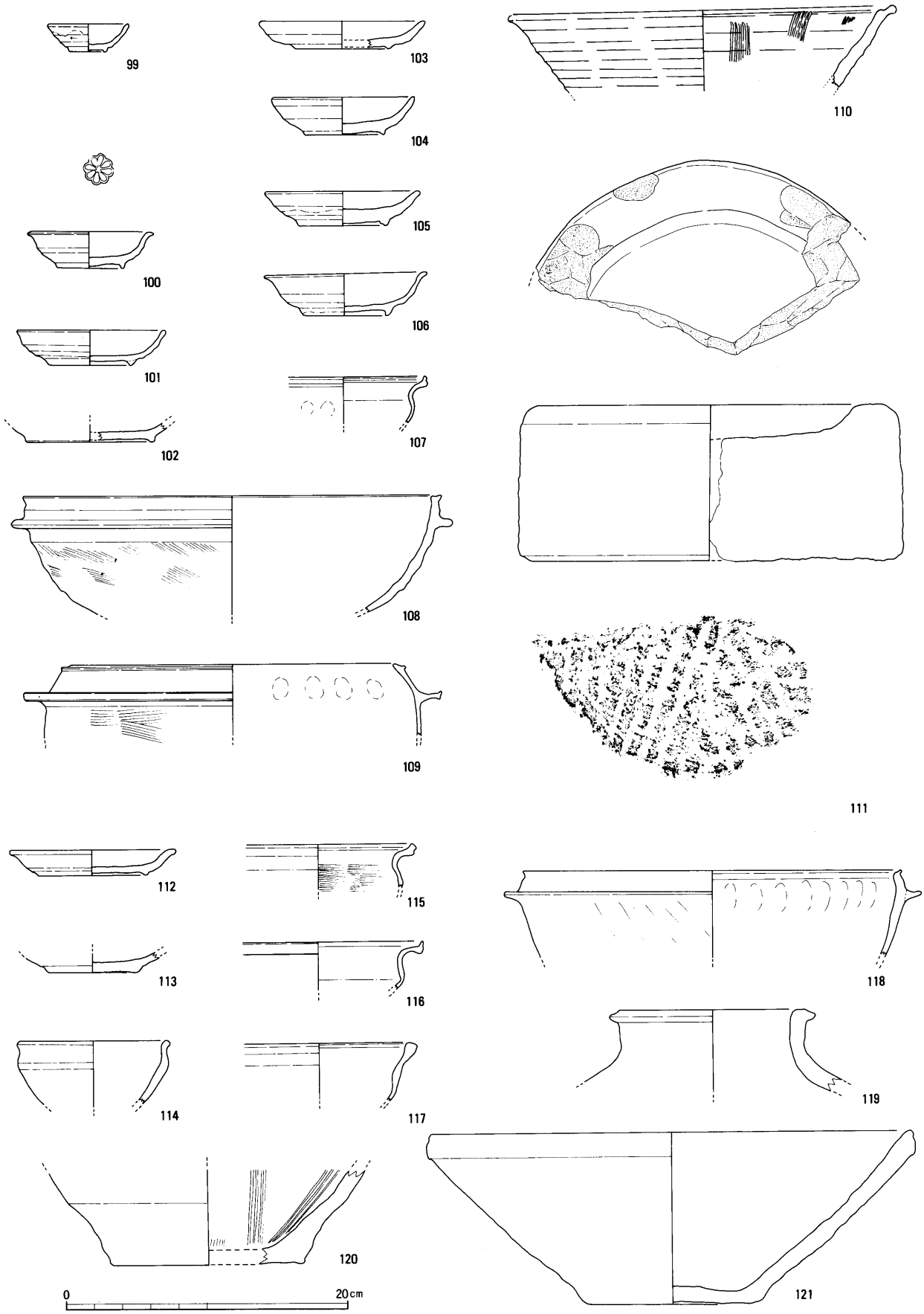
第14図　ＳＤ２出土遺物（１：４）



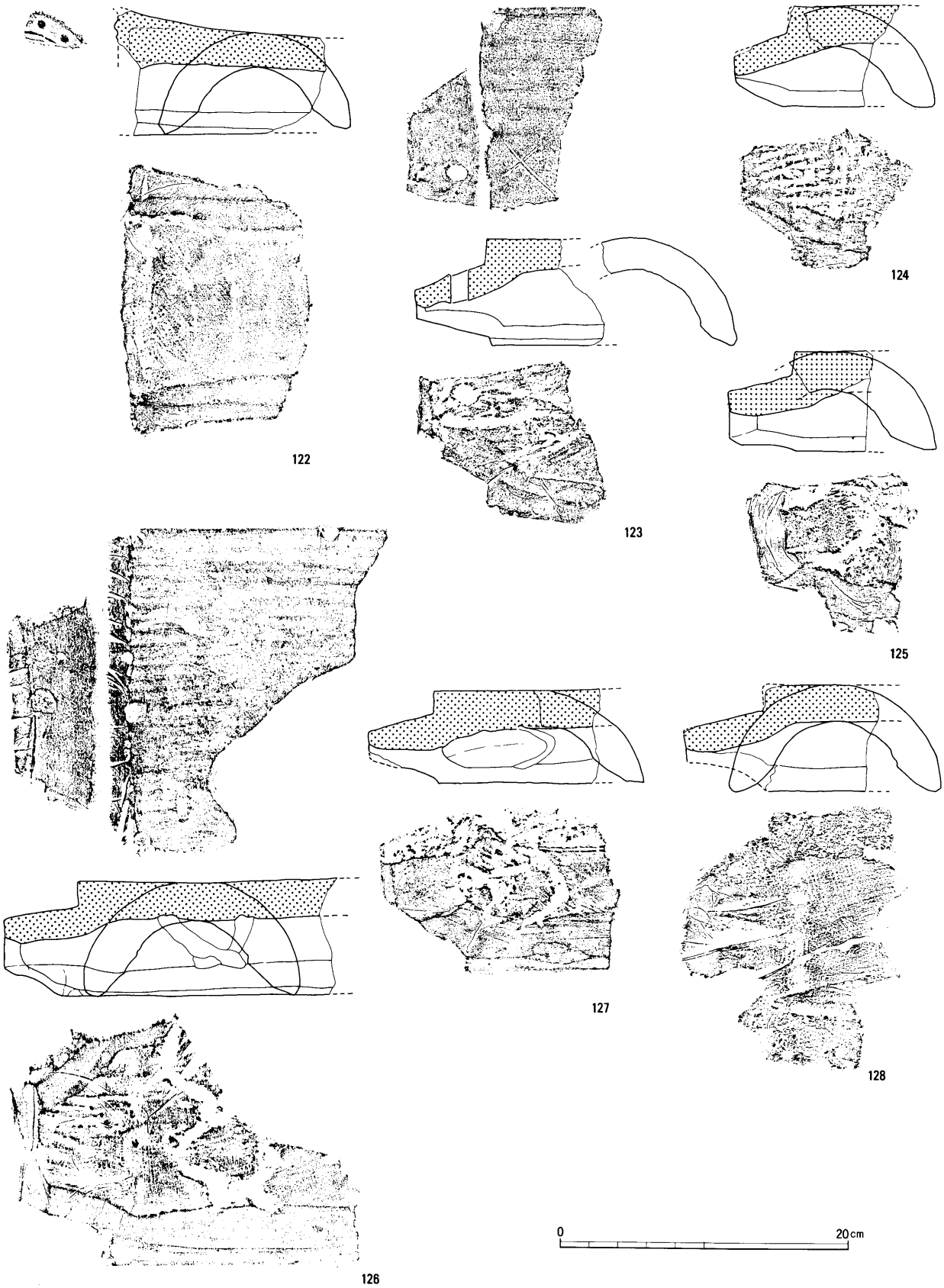
第15図　ＳＤ２出土遺物（１：４）



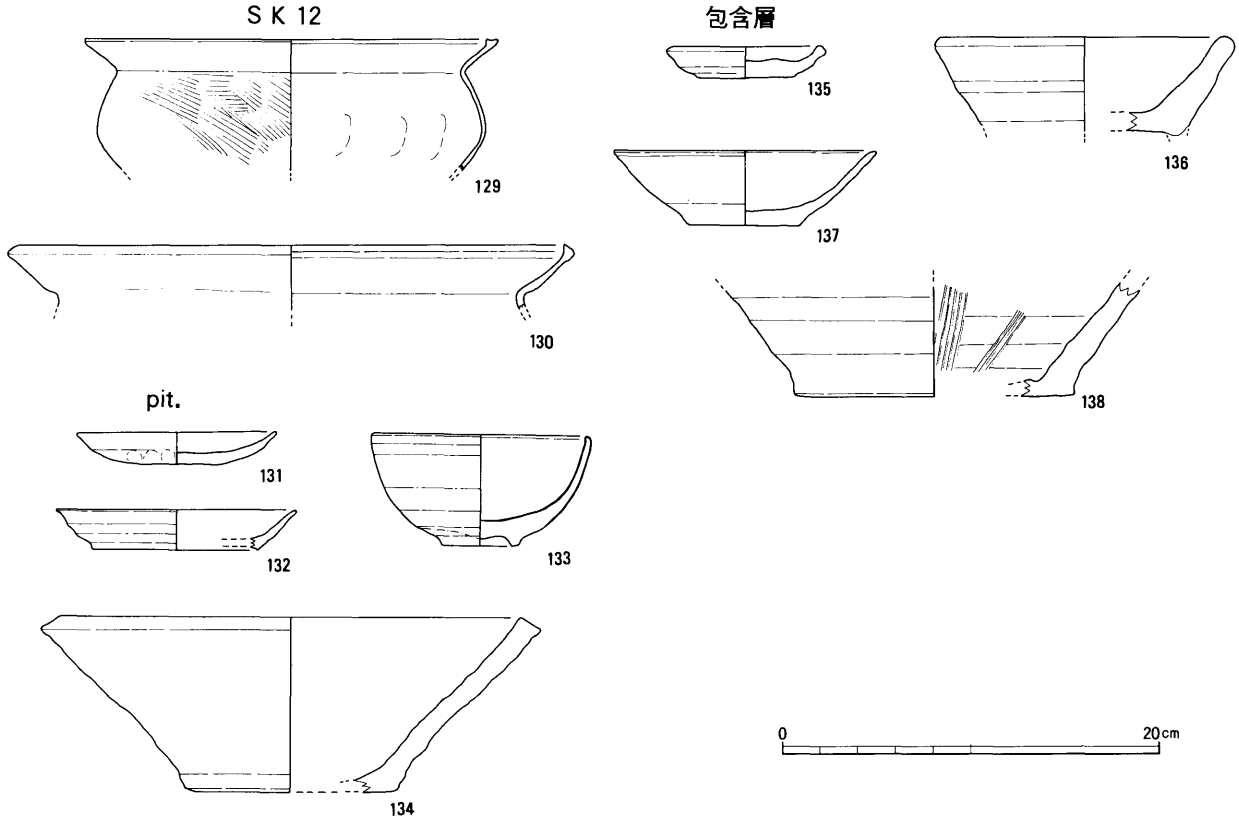
第16図　ＳＤ２出土遺物（１：４）



第17図　ＳＥ17・ＳＤ10出土遺物（１：４）



第18図　ＳＥ17・ＳＤ10出土遺物（１：４）



第19図　SK 12．pit．包含層出土遺物（1：4）

土器・瓦の観察に当たっては、以下の文献を参考にした。

伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」(『Mie History』vol. 1　1990)

伊藤裕偉「中世後期の中北勢系土師器群に関する覚書」(『研究紀要』第8号 三重県埋蔵文化財センター　1999)

藤沢良祐「瀬戸古窯址群－古瀬戸後期様式の編年」(『研究紀要』X 瀬戸市歴史民俗資料館　1991)

中野晴久「生産地における編年について」(『常滑焼と中世社会』永原慶二編 小学館　1995)

瀬戸市史編纂委員会(『瀬戸市史 陶磁史篇四』1993)

小林謙一、佐川正敏「平安時代～近世の軒丸瓦」(『伊珂留我』法隆寺昭和資財帳調査概報10　1992)

『法隆寺の至宝』第15巻(小学館　1992)

山田猛「下郡遺跡群出土の擂鉢」(『Mie History』vol.1　1990)

番号	実測番号	器種等	小地区	遺構名	計測値(cm)	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	残存度	特記事項
1	020 −03	土師器 小皿	a−9	SD1	口径 9.0 器高 1.4	内外ロクロナデ、底部糸切り	やや粗	並	灰白	口縁部 1／3	ロクロ土師器
2	010 −01	土師器 小皿	c−9	SD1	口径 8.2 器高 2.0	内外ナデ、口縁部ヨコナデ	やや粗	並	灰白	口縁部 5／8	
3	005 −04	土師器 皿	a−9	SD1	口径9〜9.4 器高 1.8	外:オサエ、ナデ 内:オサエ	やや密	並	灰黄	ほぼ完存	
4	020 −01	土師器 皿	a−9	SD1	口径 10.4 器高 1.4	外:オサエ、ナデ 内:ナデ	やや密	並	灰白	口縁部 1／3	煤付着
5	020 −02	土師器 皿	a−8	SD1	口径 10.1 器高 1.5	外:オサエ、ナデ 内:ナデ	密	並	灰白	口縁部 1／4	
6	029 −07	土師器 皿	c−7	SD1	口径 10.0 器高 2.2	外:オサエ、内:ナデ 口縁部ヨコナデ	やや粗	並	外:にぶい黄橙 内:灰白	口縁部 1／6	煤付着
7	009 −01	陶器 山茶椀	c−7	SD1	底径 8.0	内外ロクロナデ、底部糸切り、高台貼り付け	やや密	並	灰白	底部ほぼ完存	渥美
8	009 −02	陶器 山茶椀	b−10	SD1	底径 7.2	内外ロクロナデ、底部糸切り、高台貼り付け	密	並	灰白	底部 3／4	渥美
9	031 −02	木製品 荷札？	a−9	SD1	長さ 5.2 厚さ 0.3						中央1ヶ所穿孔
10	049 −05	土師器 小皿	c−6	SD2	口径 7.0 器高 1.3	外:オサエ、ナデ 内:ナデ	やや粗	並	灰白、浅黄橙	口縁部 3／4	煤付着
11	029 −03	土師器 小皿	b−9	SD2	口径 8.0 器高 2.0	外:オサエ、ナデ 内:ナデ	密	並	灰白、浅黄	ほぼ完存	
12	029 −02	土師器 小皿	c−8	SD2	口径 7.5 器高 2.2	外:オサエ 内:ナデ	密	不良	灰白	口縁部 1／2	
13	005 −02	土師器 小皿	c−8	SD2	口径 8.5 器高 1.8	外:オサエ、ナデ 内:ナデ	やや密	並	灰白	口縁部 3／4	
14	029 −01	土師器 小皿	c−8	SD2	口径 8.0 器高 2.0	外:オサエ 内:ナデ	やや密	不良	灰白	口縁部 1／3	
15	020 −04	土師器 小皿	b−10	SD2	口径 8.2 器高 2.0	内外ナデ	やや粗	並	浅黄橙	口縁部 1／4	摩耗により、調整不明瞭
16	049 −04	土師器 皿	b−9	SD2	口径 10.6 器高 1.6	外:オサエ 内:ナデ	やや密	並	灰白	口縁部 1／3	
17	010 −04	土師器 皿	c−8	SD2	口径 10.2 器高 2.3	外:オサエ、ナデ 内:ナデ	やや密	並	灰白	口縁部 1／4	口縁端部に油煙付着
18	005 −01	土師器 皿	b−10	SD2	口径 10.8 器高 2.5	外:オサエ、ナデ 内:ナデ	やや密	並	灰白	口縁部 1／2	
19	005 −03	土師器 皿	c−9	SD2	口径 7.0 器高 3.0	内外ナデ	密	良	灰白	口縁部 1／4	外面煤付着、京都系「へそ皿」
20	005 −07	瓦器 皿	b−10	SD2	口径 11.0 器高 1.0	内外ナデ 内面暗文	やや密	良	灰	口縁部 1／6	
21	029 −04	土師器 皿	b−10	SD2	口径 15.5 器高 2.2	外:オサエ、ナデ 内:ナデ	やや密	並	外:灰白、褐灰 内:灰白	口縁部 1／8	
22	011 −02	土師器 羽釜	c−8	SD2	不明	ナデ	やや粗	並	灰褐、橙		外面煤付着
23	035 −03	土師器 羽釜	c−7	SD2	口径 25.0	外:ナデ、ハケメ 内:ナデ、工具ナデ	やや粗	並	灰白	口縁部 1／8	外面煤付着
24	030 −01	土師器 羽釜	c−8	SD2	口径 29.5	ナデ	やや粗	並	外:褐灰 内:明褐灰	鍔部 1／9	外面煤付着
25	032 −05	土師器 鍋	c−6	SD2	不明	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、工具ナデ	やや粗	並	外:褐灰 内:灰白		外面煤付着
26	030 −05	土師器 鍋	c−5	SD2	口径 23.0	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	褐灰、灰黄褐	口縁部 1／6	外面煤付着
27	035 −01	土師器 鍋	c−7	SD2	口径 30.5	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、オサエ、ナデ	やや粗	並	灰白、灰黄	口縁部 3／4	外面下部煤付着
28	032 −02	土師器 鍋	c−7	SD2	口径 25.0	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、オサエ、ナデ	やや密	並	外:にぶい黄橙 内:灰白、灰褐	口縁部 1／6	外面煤付着
29	035 −02	土師器 鍋	c−7	SD2	口径 28.0	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、オサエ、ナデ	やや粗	並	灰褐、黒褐	口縁部 1／7	外面煤付着
30	033 −01	土師器 鍋	b−9	SD2	口径 34.0	外:ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内:ヨコナデ、ナデ	やや密	並	外:灰黄褐 内:灰白	口縁部 1／2	外面煤付着
31	034 −01	土師器 鍋	c−9	SD2	口径 33.0	外:ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内:ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	外:灰黄褐 内:灰白	口縁部 1／3	外面煤付着
32	011 −03	瓦質土器 火鉢	c−8	SD2	不明	ヨコナデ、貼り付け後ナデ	密	並	外:灰白 内:にぶい橙		外面スタンプ(雷文)
33	011 −04	瓦質土器 火鉢	c−8	SD2	不明	ヨコナデ、貼り付け後ナデ	密	並	淡橙 内:灰		外面スタンプ(花菱文) 二次焼成
34	019 −02	瓦質土器 火鉢	c−7	SD2	不明	ヨコナデ、貼り付け後ナデ	やや密	並	灰白		外面スタンプ(花菱文)
35	007 −01	瓦質土器 火鉢	c−8	SD2	不明	ナデ	やや密	並	灰白		外面スタンプ(菊花文)
36	012 −02	瓦質土器 火鉢	c−7	SD2	不明	ナデ	やや密	並	灰		脚部のみ、煤付着
37	007 −03	瓦質土器 火鉢	c−8	SD2	不明	ナデ	やや粗	並	にぶい橙、灰白		二次焼成

第2表　遺物観察表

番号	実測番号	器種等	小地区	遺構名	計測値(cm)	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	残存度	特記事項
38	018 −01	瓦質土器 鍋	b−9	SD2	口径 24.5	内外ナデ、口縁部ヨコナデ	密	良	灰白(外面黒変)	口縁部 1／4	外面煤付着
39	049 −06	陶器 縁釉小皿	c−6	SD2	口径 10.8 器高 2.7	内外ロクロナデ、底部糸切り、口縁部施釉	やや粗	並	灰白 釉:暗褐	底部 1／3	古瀬戸後期 鉄釉
40	010 −02	陶器 縁釉小皿	c−7	SD2	口径 12.1 器高 2.2	内外ロクロナデ、底部糸切り、口縁部施釉	密	並	灰白 釉:褐	口縁部 1／6	古瀬戸後期、鉄釉 内面に円形の施釉
41	007 −02	陶器 卸皿	c−7	SD2	口径 11.0 器高 3.8	内外ロクロナデ、底部糸切り、施釉	やや密	良	橙 釉:灰オリーブ	ほぼ完存	古瀬戸後期、灰釉、内外面に重ね焼き痕、煤付着
42	019 −01	陶器 卸皿	c−7	SD2	口径 21.0 器高 4.0	内外ロクロナデ、施釉	やや密	良	灰白 釉:灰オリーブ	口縁部 1／8	古瀬戸後期、灰釉
43	011 −01	陶器 折縁皿	b−10	SD2	口径 24.8	内外ロクロナデ、施釉	密	並	外:灰白、内:浅黄 釉:灰黄	口縁部 3／16	古瀬戸後期、灰釉
44	010 −05	陶器 平椀	c−8	SD2	底径 5.0	内外ロクロケズリ、施釉、高台削り出し	密	並	灰白 釉:灰オリーブ	底部完存	古瀬戸後期、灰釉
45	029 −05	陶器 天目茶碗	b−9	SD2	口径 12.2	内外ロクロナデ、施釉	やや密	良	灰 釉:にぶい赤褐、黒	口縁部 1／6	古瀬戸後期、鉄釉
46	027 −01	陶器 天目茶碗	b−10	SD2	口径 13.6	内外ロクロナデ、施釉	密	良	灰白 釉:黒	口縁部 1／4	古瀬戸後期、鉄釉
47	005 −06	陶器 平椀	b−9	SD2	口径 15.6 器高 6.6	内外ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉、高台削り出し	やや密	良	灰黄褐 釉:灰オリーブ	口縁部 1／2	古瀬戸後期、灰釉 煤付着
48	030 −03	陶器 平椀	c−6	SD2	口径 18.0	内外ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉	やや密	並	浅黄 釉:浅黄	口縁部 1／7	古瀬戸後期、灰釉
49	010 −03	陶器 香炉	c−9	SD2	口径 12.2	内外ロクロナデ、施釉	密	並	灰 釉: 暗灰	口縁部 1／6	古瀬戸後期、灰釉
50	009 −04	陶器	c−8	SD2	口径 15.8	内外ロクロナデ、施釉	やや密	良	灰白 釉:灰オリーブ	口縁部 1／8	古瀬戸後期
51	020 −06	青磁 椀		SD2	底径 5.1	内外ロクロナデ、施釉、高台削り出し	やや密	良	灰白 釉:灰オリーブ	底部完存	
52	009 −03	青磁 椀	c−5	SD2		内外ロクロナデ、施釉	密	良	釉:オリーブ灰	底部完存	
53	008 −01	青磁 椀	c−8	SD2	底径 6.5	内外ロクロナデ、施釉、高台削り出し	密	良	灰白 釉:オリーブ灰	底部完存	外面蓮弁文
54	010 −06	青磁 椀	c−7	SD2	底径 8.3	内外ロクロナデ、底部ロクロケズリ、施釉、高台削り出し	密	並	灰白 釉:オリーブ灰	底部 1／4	
55	018 −02	陶器 練鉢	c−8	SD2	口径 31.0 器高 10.0	内外ナデ、底部未調整	やや粗	並	灰赤	口縁部 1／7	常滑、内面使用により摩耗
56	029 −06	陶器 練鉢	c−8	SD2	底径 10.0	外:ケズリ、底部ナデ 内:ロクロナデ	やや密	良	灰、灰白	底部 1／6	煤付着
57	030 −04	陶器 練鉢	c−8	SD2	底径 14.0	内外ロクロナデ	粗	並	外:浅黄橙 内:灰白	底部 1／3	信楽、内面摩耗
58	008 −02	陶器 練鉢	c−8	SD2	口径 35.0 器高 11.0	外:オサエ、ナデ、ハケメ 内:ナデ	やや粗	並	にぶい褐、灰褐	口縁部 1／2	常滑、内面使用により摩耗、内面にヘラ記号
59	049 −03	陶器 甕	c−5	SD2	不明	内外ロクロナデ	やや粗	並	赤灰		常滑
60	049 −02	陶器 甕	c−7	SD2	不明	ロクロナデ	粗	並	黒、灰白		常滑
61	050 −01	陶器 甕	c−7	SD2	不明	ロクロナデ	やや粗	並	黒		常滑
62	047 −01	陶器 甕	c−6	SD2	口径 32.0	ロクロナデ	やや粗	並	にぶい赤褐	口縁部 1／4	常滑
63	047 −02	陶器 甕	c−5	SD2	口径 33.0	ロクロナデ	やや粗	並	明赤褐、灰褐	口縁部 1／7	常滑
64	049 −01	陶器 甕	c−6	SD2	不明	ロクロナデ	やや粗	並	灰赤、にぶい赤褐		常滑
65	006 −01	陶器 甕	c−4	SD2	口径 41.0	外:ロクロナデ、ハケメ、ナデ 内:オサエ、ナデ	やや粗	並	灰		常滑、内面煤付着
66	004 −01	石製品 茶臼	b−9	SD2	底径 25.0 最大径33.0	ケズリ					花崗岩、煤付着、摩耗のため、調整不明
67	031 −01	木製品 曲物底	c−6	SD2	径 12.0 厚さ 0.6						側面に木釘が残る
68	031 −03	木製品	c−8	SD2	長さ 8.6 厚さ 1.8					1／2か	
69	031 −04	漆器 椀	c−9	SD2	底径 6.8	内外:黒漆、外面に赤漆で、鳥の絵を描く				底部 1／6	
70	031 −05	木製品 木簡		SD2		上部左右に抉り				下部欠損	表「蘇民将…」 裏:文字はあるが読めず。
71	046 −03	石製品 砥石	a−5	SD2	幅 3.2 厚さ 0.8					下部欠損	3面使用
72	005 −02	陶器 天目茶碗	a−3	黒色粘質	口径 11.5 器高 6.4	内外ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉、高台削り出し	やや密	良	黄灰 釉:黒褐	口縁部 1／6	古瀬戸後期 煤付着
73	020 −05	青磁 椀	c−2	検出中	底径 5.3	内外ロクロナデ、底部ロクロケズリ、施釉、高台削り出し	やや密	良	灰白 釉:緑灰	底部完存	
74	009 −05	陶器 練鉢	b−3	検出中	口径 25.2 器高 12.5	内外ロクロナデ、底部ナデ	やや粗	並	橙	口縁部 1／8	信楽 煤付着

第3表　遺物観察表

番号	実測番号	器種	小地区	遺構名	計測値(cm)	調整・技法等の特徴	胎土	焼成	色調	備考
75	002－01	軒丸瓦	c－8	SD2	径 15.0	瓦当面:ナデ、オサエ(指紋) 瓦当裏面:オサエ(指紋)	やや粗	良	灰	巴文、珠文、真ん中に鳥？の模様あり
76	012－01	軒丸瓦	c－6 集石内	SD2	径 15.0	瓦当裏面:ナデ	やや粗	良	灰	75と同範
77	016－02	軒丸瓦	c－7	SD2		瓦当面:ケズリ 瓦当裏面:オサエ、ナデ、ケズリ	粗	良	灰	巴文、珠文
78	045－04	軒丸瓦	b－9	SD2		瓦当面:ケズリ 瓦当裏面:ケズリ	やや粗	良	灰	巴文、珠文
79	015－01	軒丸瓦	b－9	SD2	丸瓦幅 13.4	凸面:ケズリ、凹面:布目痕、ナデ、オサエ、端部ケズリ、面取り	粗	良	浅黄	75と同範 二次焼成
80	022－02	軒丸瓦	b－9	SD2	丸瓦厚 5.0	凸面:ケズリ 凹面:布目痕、ナデ	やや粗	並	灰	巴文、珠文
81	016－01	軒丸瓦	c－6	SD2	丸瓦厚 1.8	凸面:ケズリ凹面:布目痕、ナデ、オサエ、端部ケズリ、面取り	粗	良	灰	巴文、珠文
82	019－03	軒丸瓦		SD2		瓦当面:ケズリ 瓦当裏面:オサエ、ナデ	やや粗	良	灰白	巴文、珠文、煤付着
83	017－01	軒鳥衾	c－5	SD2	厚 1.5	凸面:ケズリ 凹面:オサエ、ナデ	やや粗	良	灰	巴文、珠文
84	001－01	軒平瓦	c－8	SD2	瓦当高 4.6 平瓦厚 2.3	瓦当面:ケズリ、面取り、凸面:ケズリ、凹面:布目痕、ナデ、端部ケズリ、面取り	粗	良	灰	蓮華唐草文
85	013－01	軒平瓦	c－7	SD2	瓦当高 4.9 平瓦厚 2.7	瓦当面:ケズリ、面取り、凸面:ケズリ、ナデ凹面:布目痕、ナデ、端部ケズリ、面取	粗	良	灰	84と同範か
86	022－01	軒平瓦	c－6	SD2	瓦当高 4.2 平瓦厚 2.5	瓦当面:ケズリ、面取り、凸面:ケズリ、ナデ凹面:布目痕、ナデ	やや粗	並	灰白	唐草文
87	016－03	軒平瓦		SD2	瓦当高 4.7 平瓦厚 1.9	瓦当面:ケズリ、面取り、凸面:ケズリ、ナデ凹面:ケズリ、端部ケズリ、面取り	やや粗	良	灰	唐草文
88	011－05	軒平瓦	c－7	SD2	瓦当高 4.6	瓦当面:ケズリ、面取り	やや粗	良	灰	唐草文
89	045－02	軒平瓦	a－5	SD2		瓦当部:ケズリ	やや粗	良	灰	唐草文
90	045－03	軒平瓦	b－9	SD2		瓦当部:ケズリ	やや粗	良	灰	唐草文
91	003－01	鬼瓦	c－7	SD2	外側厚 7.4 内側厚 5.2	ケズリ、ナデ、珠文の周囲にコンパス？痕	粗	良	灰	
92	044－01	軒丸瓦	c－8	SD2	丸瓦幅 14.2 丸瓦厚 2.5	凸面:縄タタキ後ナデ 凹面:布目痕、ナデ、端部ケズリ、面取り	粗	良	灰	瓦当面剥離
93	043－02	丸瓦	c－7	SD2	幅 14.2 厚 2.5	凸面:縄タタキ後ナデ、玉縁:ケズリ後ナデ	粗	良	灰	
94	021－01	丸瓦	c－6	SD2	幅 14.6 厚 2.2	凸面:布目痕、ナデ 凹面:ナデ、吊り紐痕、端部ケズリ、面取り	やや粗	並	にぶい黄橙	二次焼成
95	044－01	丸瓦	c－8	SD2	幅 14.2 厚	凸面:縄タタキ後ナデ 凹面:布目痕、ナデ、端部ケズリ、面取り	粗	良	灰	煤付着
96	014－01	丸瓦		SD2	厚 2.4	凸面:ケズリ 凹面:布目痕、ケズリ、端部ケズリ、面取り	やや粗	良	灰	
97	052－01	平瓦	a－9	SD2	厚 2.4	調整不明	やや粗	並	にぶい黄橙	鳥のスタンプ。二次焼成
98	043－01	鳥衾	c－5	SD2	厚 3.5	外面:ケズリ、ナデ 内面:布目痕、タタキ、端部ケズリ	やや粗	良	灰	
122	042－02	軒丸瓦	b－2	SE17	丸瓦幅 13.0 丸瓦厚	凸面:ナデ、凹面:布目痕、糸切り痕、ナデ、端部ケズリ、面取り	やや粗	良	灰	煤付着
123	041－01	丸瓦	a－2	SD10	幅 2.3	凸面:縄タタキ後ナデ 凹面:ナデ	粗	良	灰白	釘穴焼成前穿孔、凸面ヘラ記号「×」
124	039－02	丸瓦	b－2	SD10	幅 2.8	凸面:ケズリ 凹面:布目痕、ナデ、端部ケズリ、面取り	粗	良	灰白	二次焼成、煤付着
125	040－01	丸瓦	b－2	SE17	厚 2.8	凸面:ナデ、玉縁ナデ 凹面:布目痕、糸切り痕、端部ケズリ、面	やや粗	並	にぶい黄橙	二次焼成、煤付着
126	036－01	丸瓦	b－2	SE17	幅 15.4	凸面:縄タタキ後ケズリ、玉縁ナデ、凹面:布目痕、吊り紐、ナデ、端部ケズリ、面取り	やや粗	良	灰	煤付着
127	037－01	丸瓦	b－2	SE17	厚 2.0	凸面:縄タタキ後ナデ、玉縁ケズリ後ナデ 凹面:布目痕、吊り紐、端部ケズリ、面取り	粗	良	灰	
128	042－01	丸瓦	b－2	SD10	幅 25.0	凸面:縄タタキ後ナデ、玉縁ケズリ後ナデ 凹面:布目痕、ナデ、端部ケズリ	やや粗	良	灰	煤付着

第4表　遺物観察表

番号	実測番号	器種等	小地区	遺構名	計測値(cm)	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	残存度	特記事項
99	023 −05	陶器 小杯	b−2	SE17	口径 5.6 器高 2.0	内外ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉	密	良	明褐 釉:黒褐	完存	鉄釉
100	023 −04	陶器 端反皿	b−2	SE17	口径 8.4 器高 2.6	内外ロクロナデ、施釉、高台削り出し	密	良	灰白 釉:浅黄	口縁部 1／2	大窯、灰釉、内面に印花
101	023 −01	陶器 丸皿	b−2	SE17	口径 10.5 器高 2.6	内外ロクロナデ、施釉、高台貼り付け	密	良	灰白 釉:灰オリーブ	ほぼ完存	大窯、灰釉、底部外面に重ね焼き痕
102	026 −03	陶器	b−2	SE17	底径 9.0	ロクロナデ、高台削り出し、施釉	やや密	並	灰 釉:灰白	底部 1／4	大窯、志野、煤付着
103	026 −05	陶器 丸皿	b−2	SE17	口径 11.8 器高 2.0	内外ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉、高台削り出し	やや粗	並	灰 釉:灰白	口縁部 1／6	大窯、志野
104	023 −03	陶器 丸皿	b−2	SE17	口径 10.1 器高 2.7	内外ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉、高台削り出し	密	良	灰白 釉:浅黄	ほぼ完存	大窯、灰釉
105	026 −01	陶器 丸皿	b−2	SE17	口径 11.0 器高 2.5	内外ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉、高台削り出し	やや粗	並	灰白 釉:淡黄	口縁部 1／6	大窯、灰釉、内面に重ね焼き痕
106	023 −02	白磁 椀	b−2	SE17	口径 11.4 器高 3.0	内外ロクロナデ、施釉、高台削り出し	密	良	灰白 釉:灰白	完存	明産、外面に重ね焼きの小石付着
107	048 −02	土師器 鍋	b−2	SE17	不明	外:ヨコナデ、オサエ、ナデ 内:ヨコナデ、ナデ	やや密	並	外:にぶい橙、褐灰 内:にぶい橙		煤付着
108	025 −01	土師器 羽釜	b−2	SE17	口径 28.8	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ナデ	やや密	良	橙	口縁部 1／6	内外煤付着
109	024 −03	土師器 羽釜	b−2	SE17	口径 23.2	外:ヨコナデ、ハケメ 内:オサエ、ナデ	密	良	にぶい黄橙	鍔部 1／6	鍔下〜煤付着
110	024 −01	陶器 擂鉢	b−2	SE17	口径 30.0	内外ロクロナデ 擂り目5本	やや粗	良	橙	口縁部 1／5	信楽
111	038 −01	石製品 石臼	b−2	SE17	最大径27.2 器高 11.2	ケズリ				3／8	花崗岩、摩耗のため溝不明瞭、8分画6溝式、煤付
112	026 −06	陶器 皿	c−2	SD10	口径 11.8 器高 1.8	内外ロクロナデ、施釉、高台削り出し	やや粗	良	灰白 釉:灰白	口縁部 1／12	大窯、灰釉
113	026 −04	陶器	b−2	SD10	底径 6.6	内外ロクロナデ、施釉	やや粗	並	灰白 釉:灰白	底部 3／5	大窯、志野 煤付着
114	027 −02	陶器 椀	b−3	SD10	口径 10.6	内外ロクロナデ、施釉	密	良	灰白 釉:褐	口縁部 1／8	大窯、鉄釉
115	048 −01	土師器 鍋	b−2	SD10	不明	外:ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ、ハケメ	やや密	並	外:灰褐 内:黒褐		外面煤付着
116	037 −02	土師器 鍋	c−2	SD10	不明	内外ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	橙		外面煤付着
117	048 −04	土師器 鍋	c−2	SD10	不明	ナデ	やや密	並	外:褐色 内:橙		内外煤付着
118	027 −03	土師器 羽釜	b−3	SD10	口径 27.0	外:ヨコナデ、ケズリ 内:ヨコナデ、オサエ、ナデ	やや密	良	褐灰	口縁部 1／8	外面煤付着
119	027 −05	陶器 壷	b−2	SD10 炭層	口径 13.4	内外ロクロナデ	やや粗	並	にぶい橙	口縁部 1／2	常滑か 煤付着
120	026 −07	陶器 擂鉢	c−2	SD10	底径 13.6	内外摩耗、底部未調整	やや粗	不良	灰白	底部 1／3	信楽、被熱、煤付着
121	028 −02	陶器 練鉢	b−2	SD10	口径 34.6 器高 12.2	被熱により、剥離のため、調整不明。底部ナデ	粗	並	浅黄橙	口縁部 1／5	被熱により剥離、煤多く付着
129	028 −01	土師器 鍋	c−7	SK12	口径 22.0	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ナデ、オサエ	やや粗	並	浅黄橙	口縁部 1／8	外面煤付着
130	027 −04	土師器 鍋	c−7	SK12	口径 29.2	ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	浅黄橙	口縁部 1／12	外面煤付着
131	046 −02	土師器 皿	c−3	pit. 2	口径 12.8 器高 1.8	外:オサエ、内:ナデ 口縁端部ヨコナデ	やや密	並	にぶい黄橙	口縁部 1／8	
132	027 −06	陶器 稜皿	a−3	pit. 2	口径 13.2	内外ロクロナデ、施釉	やや密	良	灰白 釉:灰白	口縁部 1／4	大窯、灰釉
133	032 −04	陶器 丸椀	b−3	pit. 2	口径 11.5 器高 5.9	内外ロクロナデ、施釉、高台削り出し	やや密	良	灰褐 釉:灰、オリーブ黒	底部 1／2	唐津産
134	032 −03	陶器 練鉢	b−3	pit. 3	口径 24.5 器高 9.4	被熱による剥離著しく、調整不明	粗	並	外:灰黄、灰白 内:淡黄	口縁部 1／8	被熱により表面剥離、煤付着
135	046 −01	陶器 山皿	d−4	包含層	口径 8.0 器高 1.7	内外ロクロナデ、底部糸切り	やや粗	良	灰白	口縁部 1／8	尾張
136	050 −02	陶器	a−5	包含層	口径 16.0	内外ロクロナデ、底部ナデ	やや粗	並	にぶい黄橙、暗赤褐	口縁部 1／8	脚部剥離
137	026 −02	土師器 椀	c−3	包含層	口径 14.0 器高 4.0	内外ロクロナデ、底部糸切り	やや粗	並	灰白	口縁部 若干	ロクロ土師器
138	030 −02	陶器 擂鉢	a−2	包含層	底径 15.0	内外ロクロナデ、底部ナデ	やや粗	並	外:橙 内:にぶい橙	底部 1／6	信楽

第5表　遺物観察表

Ⅴ まとめ

1　A地区について

中世小倭周辺については、近年立教大学日本中世史研究会により、成願寺の所在する上ノ村を中心に踏査が行われ、いくつかの報告がされている[1]。成願寺文書は在地徳政の研究に活用されており[2]、当地域が中世を研究する上で注目されているといえるであろう。

今回の発掘調査からは、大量の瓦が出土した事により、調査区周辺に中世寺院が存在したことが明らかになった。調査区周辺には、応仁の乱の際に足利義視が訪れた、調査区西隣に所在した常光寺の他、北方に岡寺、南方に恵光寺、本願寺などが存在したという伝承地がある。いずれも存続期間は不明であるが、A地区ＳＤ２出土遺物の下限が１５世紀後葉と考えられることから、この時期にいずれかの寺院の廃絶、あるいは建て替えがあったものと推定される。遺物は被熱しているものもあり、火災があったと考えられる。

当時、佐田周辺での大きな出来事いえば、成願寺の建立がある。前述の恵光寺は在来の寺か新建立の寺か不明であるが、成願寺と同じく不断念仏の道場となっている。今回の発掘調査により、この真盛上人の教化により、その他の寺院でも廃絶、あるいは建て替えが行われた事が考えられる。これらから推測すれば、今回の瓦は北方の岡寺か恵光寺の瓦である可能性が考えられる。

2　B地区について

『勢州軍記』には、天正12年（1583年）蒲生氏郷により、小倭地域は攻略され、口佐田城や奥佐田城が戦場となった記事がある[3]。B地区で検出したＳD10、ＳE17は、炭・焼土を含む層に覆われており、出土した遺物は16世紀中葉～末と思われる大窯期の陶器、土師器鍋などである。遺構は後に掘り返された痕跡は見られず、16世紀末に廃絶されたと考えられ、記録を考古学的に裏付けるものと考えられる。

当時調査区の西隣、現在の常照寺の辺りには、常光寺という相当広い寺地を持った寺院が存在していた。B地区は字「垣外」（かいげ）と呼ばれ、これは常光寺の「界外」、すなわち隣接地を示していると思われる。今回見つかった掘立柱建物群は、常光寺に関わる集落跡と考えられる。

B地区で検出できた遺構から時期の推定できるものは、ＳE17・ＳD10が16世紀中葉～末頃、SK12が15世紀後葉の遺構と考えられる他は、遺物がほとんど出土しておらず、不明である。掘建柱建物は空間・時間の異なるいくつかの重なりを持って存在していたと思われるが、16世紀末と考えられる唐津産丸椀が柱材に貼り付いた状態で出土している事から、掘立柱建物の下限を示すものと考えられる以外には、正確な時期は不明である。これは、小倭侵攻により集落が打撃を受けた影響と考えられよう。調査区からは後の時代の遺物も出土しておらず、当調査区内では集落は廃絶したものと思われる。

B地区の建物の上限を示す資料としては、包含層からロクロ土師器皿･山皿が出土しており、12世紀に建物が作られ始めた可能性も考えられる。

3　出土遺物について

今回の発掘調査により、A地区では14世紀後葉～15世紀代の、B地区では16世紀中葉～末頃の遺物が出土した。寺の生活というものがはっきりとはしないものの、遺物の特徴を述べてみたい。

A地区では、寺跡の発掘調査ではなく、遺物の廃棄された溝からの出土のため、一括資料とはいえないものの、供膳用具の皿・椀、煮沸用具の鍋・羽釜、調理用具の練鉢・擂鉢、貯蔵具の甕など一定量の生活用具が出土している。土師器では、皿・小皿では南伊勢系と中北勢のものが同数程度出土しているのに対し、鍋・羽釜では南伊勢系のものしか見られないことが窺える。また、常滑産の陶器甕破片が大量出土しているが、一般集落とは違う寺院の生活を示すものであろうか。

ＳＤ２から出土した「蘓民将来」の木簡は、疫病等の災難から身を護るものと考えられている。残念

ながら明確な出土状況を知る事は出来なかった。三重県内では四日市市赤堀城跡[3]、松阪市阿形遺跡[4]・伊勢寺遺跡[5]、多気町内垣外遺跡[6]で出土しており、下記3遺跡ではいずれも井戸から出土している。水による浄化や、水を媒介にして異界に送る場として井戸を使用したものと考えられている[7]。今回の発見例も、災除けの役目を終えた呪符を流す場として、ＳＤ２が使用されたと思われる。

Ｂ地区からは、出土数は少ないものの16世紀末に埋没したと思われるＳＥ17・ＳＤ10からの一括資料を得る事が出来た。土師器類に比べある程度の使用期間を考える必要があるものの、陶器類では大窯期の皿・椀類と共に、中北勢系と南伊勢系の土師器羽釜、南伊勢系４段階 e 型式以降と思われる土師器鍋が出土している。中北勢系の羽釜は同じ白山町の家野遺跡[8]でも一定量出土しており、雲出川中流域の特徴をあらわしているものと思われる。

4　今後の課題

今回の発掘調査では、Ａ地区から破片ではあるが多量の中世瓦が出土した。残念ながら小破片が多く、また二次焼成を受けているため、調整等が不明な瓦が多い。また、鳥？と思われるような模様が軒丸瓦、平瓦に見られるような瓦については、今回類例を知る事が出来なかった。三重県内では中世瓦の出土は多くなく、今後の資料の増加を待ちたい。

Ｂ地区からは16世紀末を下限とする集落を確認する事が出来た。白山町内には、14～16世紀の屋敷跡の見つかった家野遺跡の他、古市遺跡、田中名遺跡、岩脇Ｃ遺跡などで中世の遺構・遺物が見つかっている。今後それらと比較検討する事により、当時の白山町の様子を明らかしていきたいと思う。

註

(1)　矢島有希彦・福原圭一・窪田涼子「成願寺・城・五輪塔」(藤木久志・荒野泰典編著『荘園と村を歩く』校倉書房　1997)、立教大学日本中世史研究会「戦国期小倭成願寺と村の復元」(『三重県史研究』第14号　1998)

(2)　瀬田勝哉「中世末期の在地徳政」(『史学雑誌』第77編第９号　1968)、勝俣鎮夫『一揆』(岩波書店　1983)、池上裕子「村の徳政令」(『集英社版日本の歴史　戦国の群像』集英社　1992)など。

(3)　北野保『赤堀城跡』(四日市市埋蔵文化財報告16　四日市市教育委員会　1996)

(4)　福田哲也・石川隆郎「阿形遺跡」(『ヒタキ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター　1992)

(5)　竹内英昭「伊勢寺遺跡」(『平成２年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告ー第２分冊ー』三重県埋蔵文化財センター　1991)

(6)　西出孝『内垣外遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター　1997)

(7)　小林秀「３蘓民将来の呪符について」(註(4)に所収)

(8)　服部久士「家野遺跡」(『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告ー第１分冊ー』　三重県埋蔵文化財センター　1990)

その他、

色井秀譲『白山町文化誌』1973を参考にした。

A地区全景（北から）

A地区作業風景（南から）

ＳＤ２（北から）

ＳＤ２石橋（南から）

B地区全景（南から）

B地区全景（北から）

B地区ＳＢ 20 ・ 21 ほか（北から）

ＳＥ 17 検出状況（北から）

ＳＥ 17 完掘状況（北から）

ＳＥ 17、ＳＤ 10 完掘状況（東から）

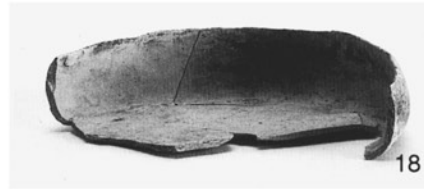
b 3 pit. 2 （柱）（南から）

2

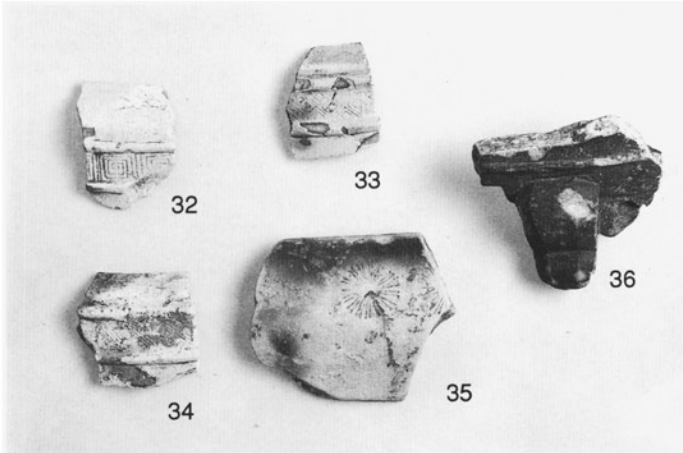
3

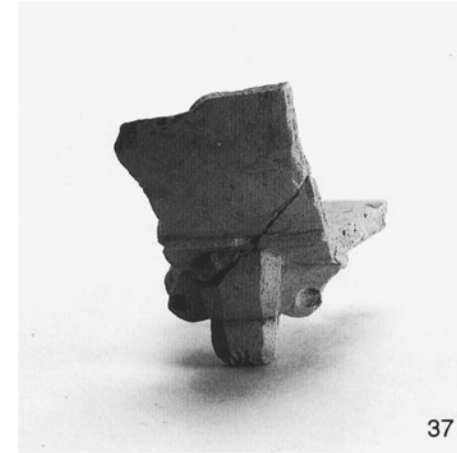
11

13


18

19

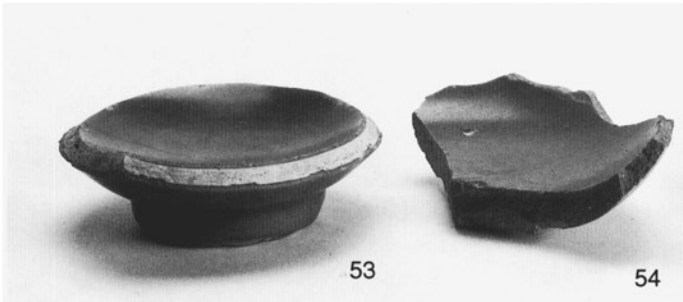

32
33
34
35
36


37

42

41

47

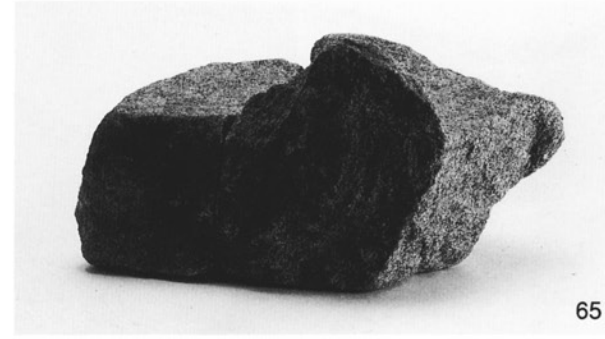

53
54

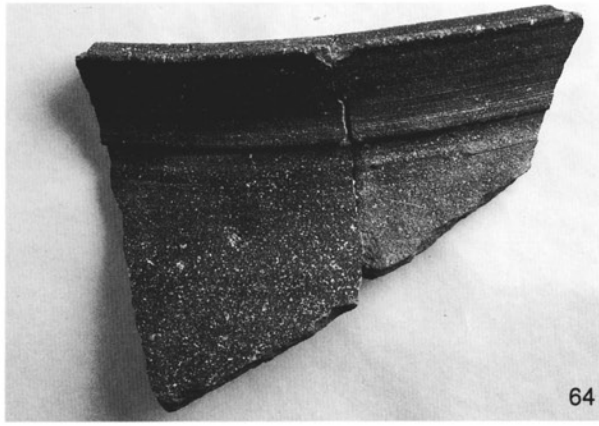
57

30

58

63


65

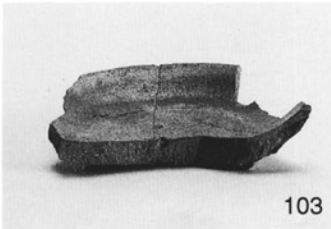

64

69

99

100

101

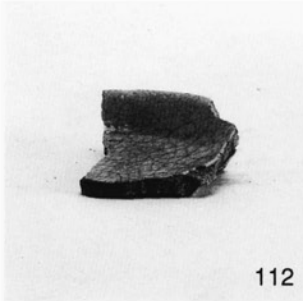

103

104

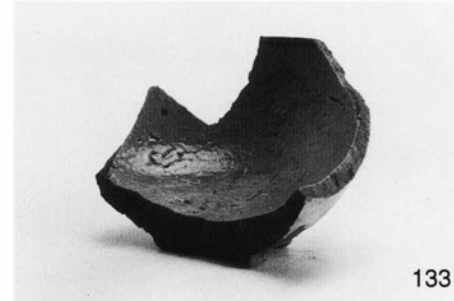
106

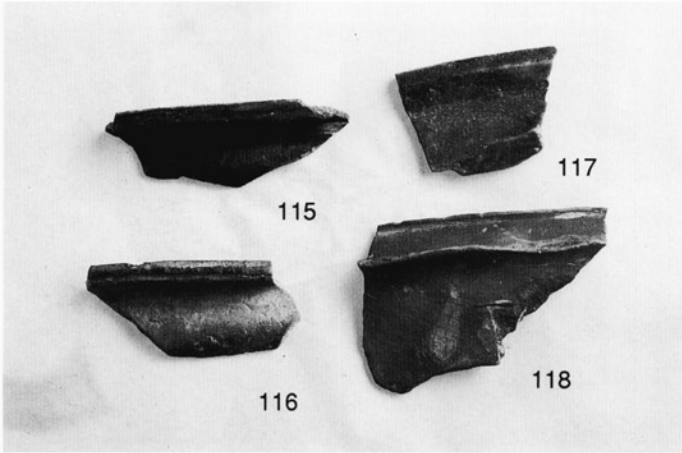
108

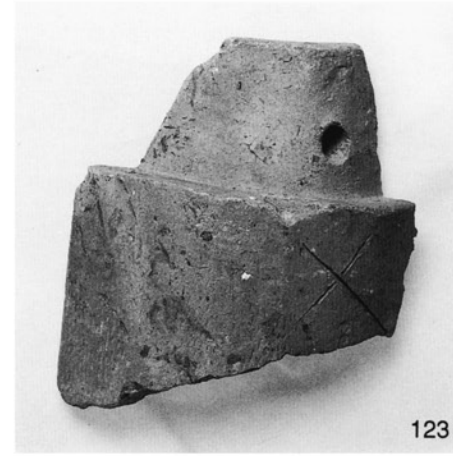
111

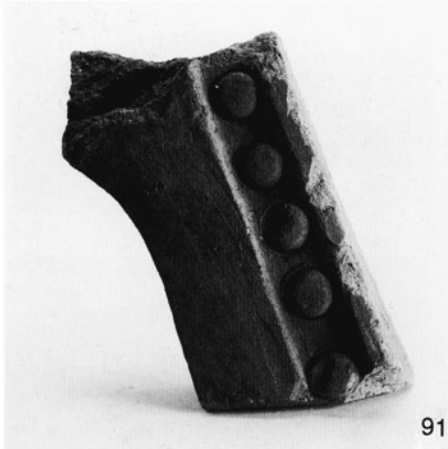

112

120

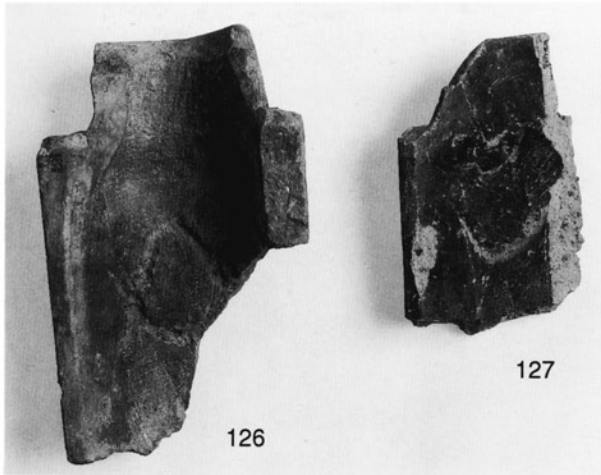

133

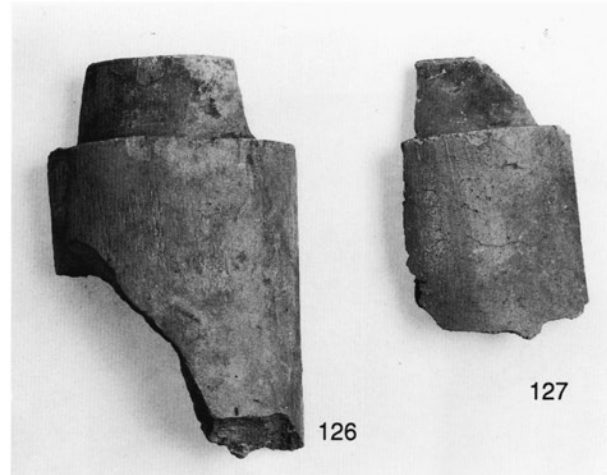



123


91

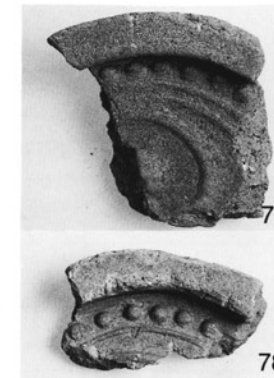
97





75

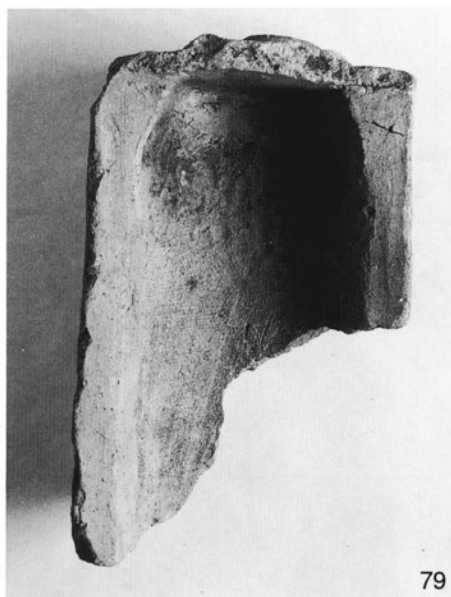
76


77
78

79

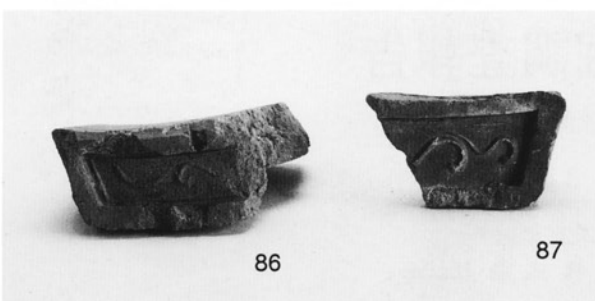
82

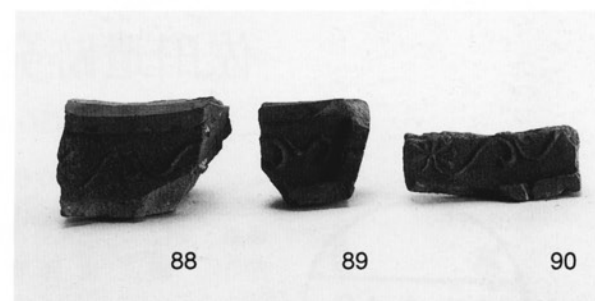
83


79

84

85


86
87


88
89
90

報告書抄録

ふりがな	さだいせきはっくつちょうさほうこく
書名	佐田遺跡発掘調査報告
副書名	一志郡白山町佐田所在
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	210
編著者名	水谷　豊
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596－52－1732
発行年月日	2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
さだいせき 佐田遺跡	みえけんいちしぐん 三重県一志郡 はくさんちょうさだあざ 白山町佐田字 ながたまえ、かいげ 永田前、垣外	24404	112	34° 40′ 12″	136° 17′ 50″	1998.9.10 ～ 11.4	A地区 850m² B地区 650m²	平成10年度 一般地方道亀山白山線県単道路整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
佐田遺跡					
A地区	集落跡	鎌倉～室町時代	溝	土師器 陶器 瓦	陶器片、瓦片多量に出土
B地区	集落跡	鎌倉～桃山時代	掘立柱建物 井戸 溝	陶器 土師器 瓦	石組井戸、石組溝

平成12(2000)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年10月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　210

佐田遺跡発掘調査報告

－一志郡白山町佐田所在－

2000年 3月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　東海印刷株式会社